

# 大学における AI活用実態調査

—AIを前提とした教育・研究・大学運営の現在地—

eラーニング戦略研究所  
eLearning Strategy Research Institute

# 目次

## 調査概要

---

P.3

## サマリ

---

P.5

1. 大学教員のAI活用が広がる。とくに研究活動での効果実感が高い傾向
2. 学生のAI活用拡大を受け、6割以上が「授業・課題・評価方法」を見直しへ
3. 大学のAI活用成熟度はほぼ3分。約7割が「ルール整備・組織運用段階」
4. 文系・理系・情報系・医療系——専門分野によって用途や支援に違い

## 調査結果

---

P.10

1. 大学教員のAI活用
2. 学生のAI活用
3. 授業・課題・評価への影響
4. 大学の運用体制
5. 課題と求められる支援
6. AI活用成熟度分析
7. 専門分野別分析

# 調査概要

# 調査概要

|       |                                                                                                                     |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査目的  | 大学教員を対象に大学における生成AI活用の実態を調査する。単なる利用率調査にとどまらず、複数の設問をもとに「AI活用成熟度」を定義し、成熟度別の課題や支援要件を明らかにする。※本レポートでは、以降「生成AI」を「AI」と表記する。 |
| 調査手法  | アンケート専門サイトを用いたWebアンケート調査                                                                                            |
| 調査期間  | 2026年7月2日～7月8日                                                                                                      |
| 調査対象者 | 国公立大学、私立大学の教員<br>職位：教授、准教授、講師、助教、特任教授・客員教授（いずれも常勤教員）                                                                |
| 有効回答数 | 115名<br>大学種別内訳：国公立43名、私立72名<br>専門分野別内訳：文系41名、理系39名、情報系13名、医療系22名                                                    |
| 実施主体  | eラーニング戦略研究所                                                                                                         |

# サマリ

## 1. 大学教員のAI活用が広がる。とくに研究活動での効果実感が高い傾向

---

- ① 大学教員の86.1%が校務、70.4%が授業準備、91.3%が研究活動でAIを利用しており、教育・研究活動全般でAI活用が広がっている。
- ② 主なAI利用用途は、校務では「会議資料・学内文書作成」、授業準備では「教材作成」、研究活動では「翻訳・英文作成」「論文や資料の要約」となっている。
- ③ 利用頻度は「ほぼ毎日」「週数回」が全体の71.3%を占め、大学教員にとってAI利用が日常的になっている。
- ④ 大学教員の87%がAI利用による効果を実感しており、最も多く実感された効果は「研究活動の効率化・時間短縮」（66.1%）だった。
- ⑤ 89.6%が大学教育にとって有用と評価しており、AIは教育・研究活動を支える実務ツールとして浸透しつつある。

## 2. 学生のAI活用拡大を受け、6割以上が「授業・課題・評価方法」を見直しへ

---

- 1 授業・課題・評価方法については41.7%が変更済みであり、「今後変更予定」を含めると6割以上が見直しを予定または実施している。
- 2 変更内容は「課題内容・形式の見直し」が最も多く、「評価方法・評価基準の見直し」「試験形式・実施方法の見直し」が続いた。
- 3 背景には、学生のAI利用が「レポート作成」を中心に、「情報収集・整理」「プレゼン資料作成」「翻訳・語学学習」など学習活動全般に広がっていることが挙げられる。
- 4 自由記述では、「学生がレポートをAIで作成してくるので困っている」といった声のほか、不正利用への対応や評価方法、学生の思考力低下への懸念など、大学教育ならではの課題が多く挙げられた。
- 5 学生のAI利用については「一定条件のもとで利用を認めている」が過半数を占める一方、約2割は運用方針を定めていない。大学によって学生利用ルールや運用体制には差があり、対応状況にはばらつきがみられる。

### 3. 大学のAI活用成熟度はほぼ3分。約7割が「ルール整備・組織運用段階」

---

- 1 本調査では、教員のAI利用状況や授業・評価方法の変更、大学のルール整備などをもとに「AI活用成熟度」を4段階に分類した。
- 2 その結果、「Lv2：限定導入段階」（28.7%）、「Lv3：ルール整備段階」（36.5%）、「Lv4：組織運用段階」（33.9%）がそれぞれ約3分の1を占め、AI活用成熟度は3つの層にほぼ分かれる結果となった。
- 3 そのうち約7割はルール整備以上の段階に達しており、組織的なAI活用が進みつつあることがうかがえる。
- 4 組織運用段階（Lv4）では、AIの効果実感や有用性評価が特に高い結果となった。
- 5 AI活用成熟度が高い層では、LMSなど既存システムとの連携や利用ログ・管理機能の整備など、運用基盤の充実への関心が比較的高かった。

## 4. 文系・理系・情報系・医療系——専門分野によって用途や支援に違い

---

- 1 教員の専門分野によっても、校務・授業準備・研究活動におけるAI利用用途に違いがみられた。
- 2 一例として、研究活動では、理系で「翻訳・英文作成」や「論文・研究資料作成」、情報系で「論文や資料の要約」や「プログラミング・コーディング」の割合が高く、それぞれの分野特性に応じた活用が進んでいる。
- 3 授業・課題・評価方法の変更状況にも専門分野による違いがみられ、情報系では変更済みの割合が高い一方、医療系では変更していない割合が比較的高かった。
- 4 AI利用による効果実感や大学教育における有用性については、専門分野による大きな差はみられず、いずれの分野でも高く評価されていた。
- 5 必要な支援についても専門分野によって傾向が異なり、大学全体で一律の対応ではなく、分野特性を踏まえた支援や環境整備が求められる。

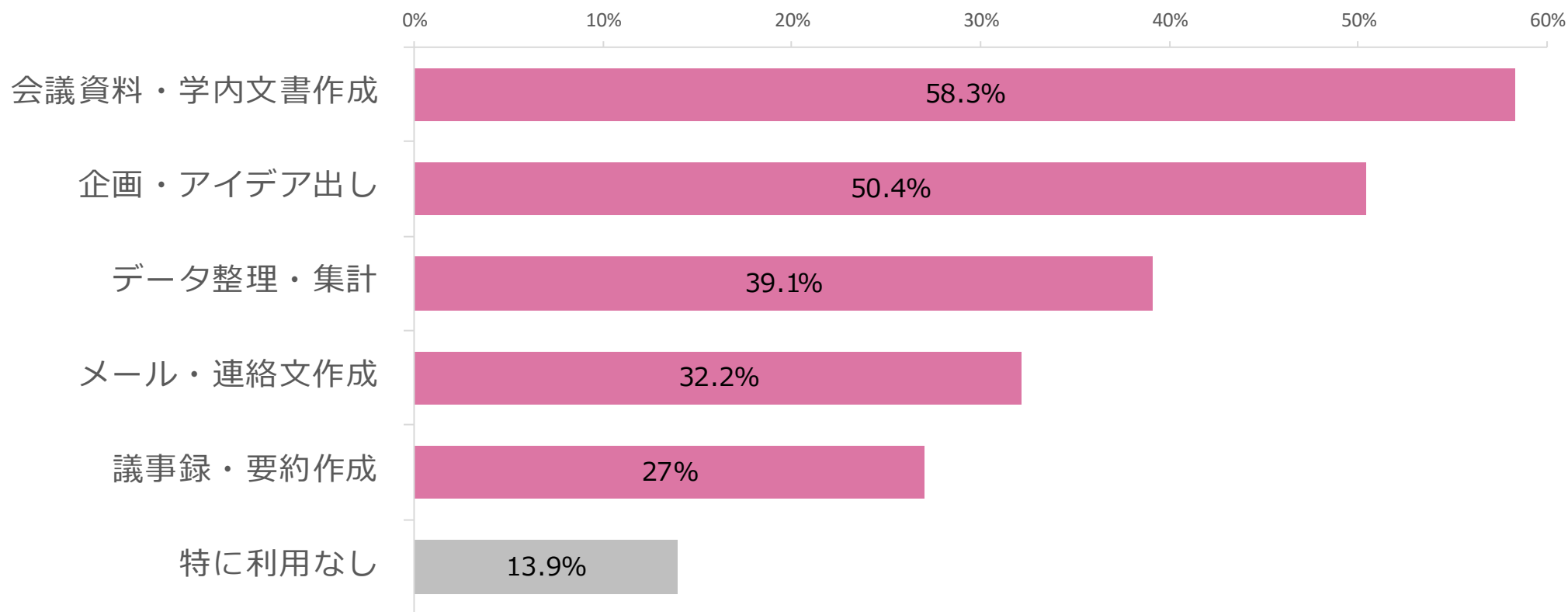
# 調査結果

## 1. 大学教員のAI活用

# 調査結果

## 1-1. 校務におけるAI利用

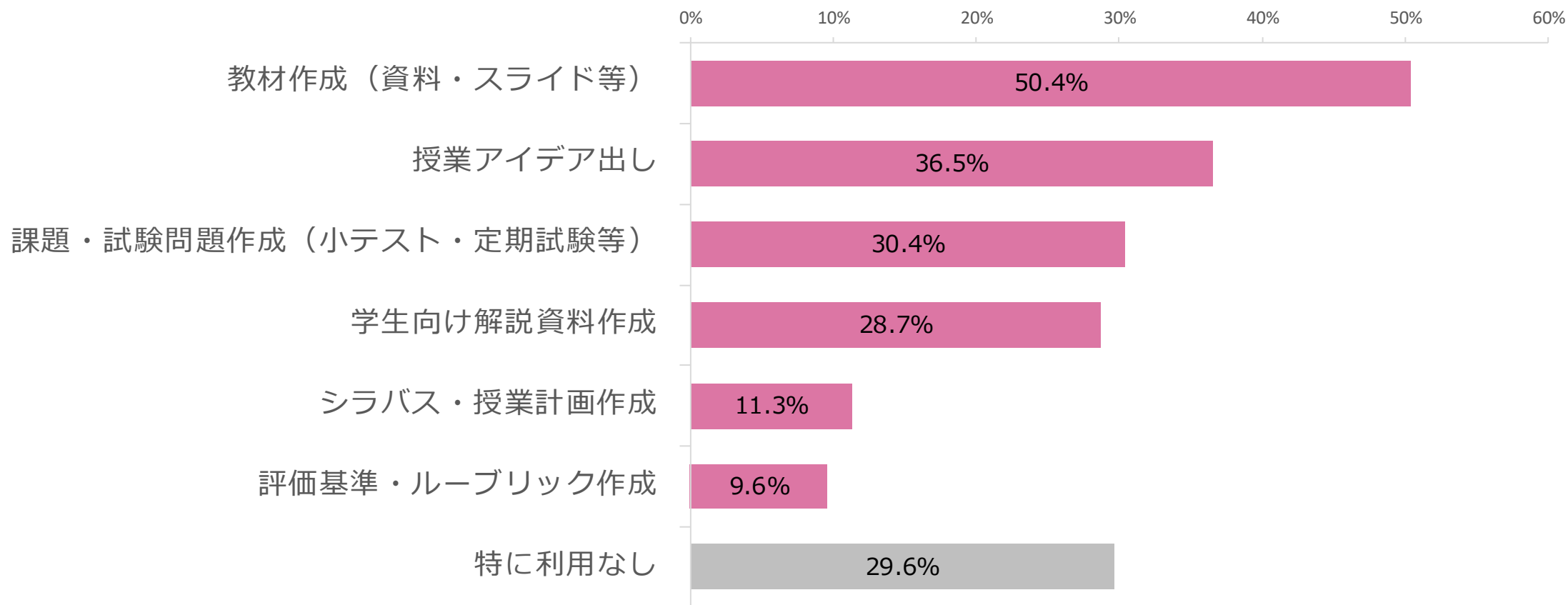
86.1%の教員が校務でAIを利用している。用途は「会議資料・学内文書作成」（58.3%）が最も多く、次いで「企画・アイデア出し」（50.4%）、「データ整理・集計」（39.1%）が続く。



# 調査結果

## 1-2. 授業準備におけるAI利用

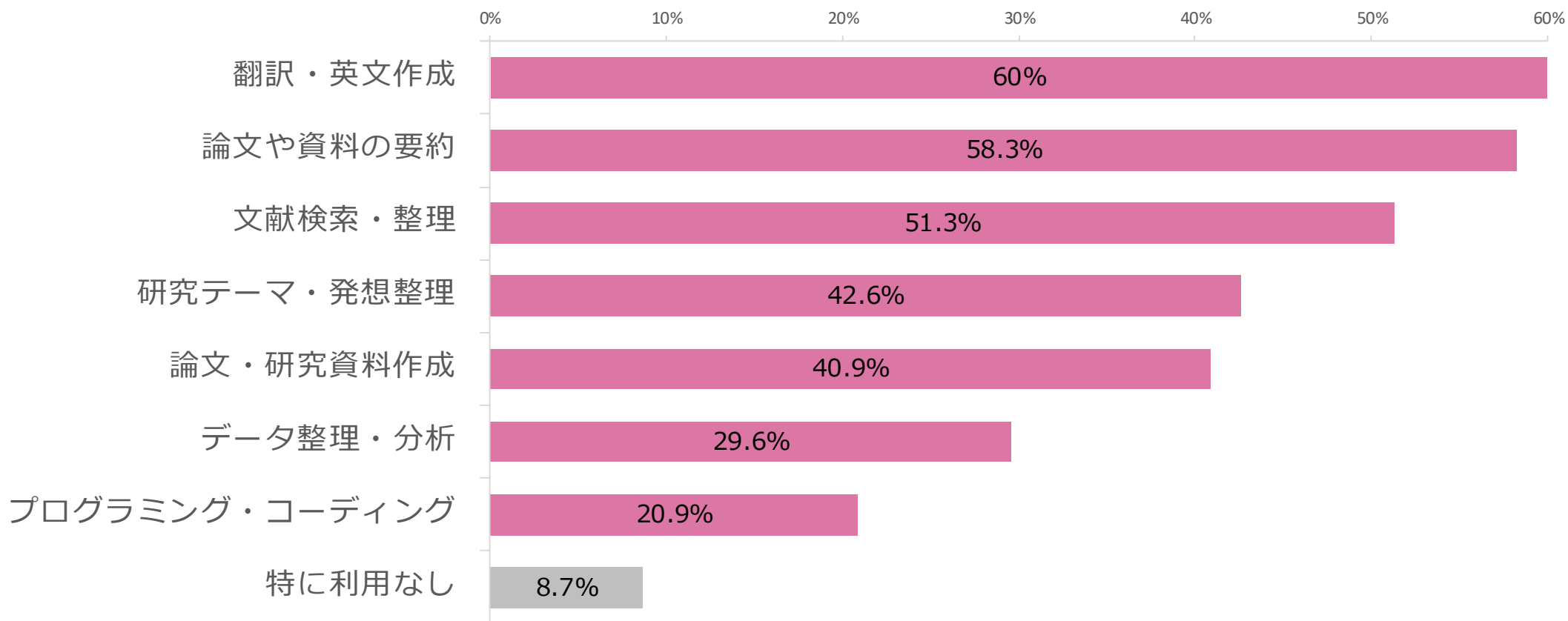
授業準備におけるAI利用率は70.4%。用途は「教材作成」（50.4%）が最も多い。



# 調査結果

## 1-3. 研究活動におけるAI利用

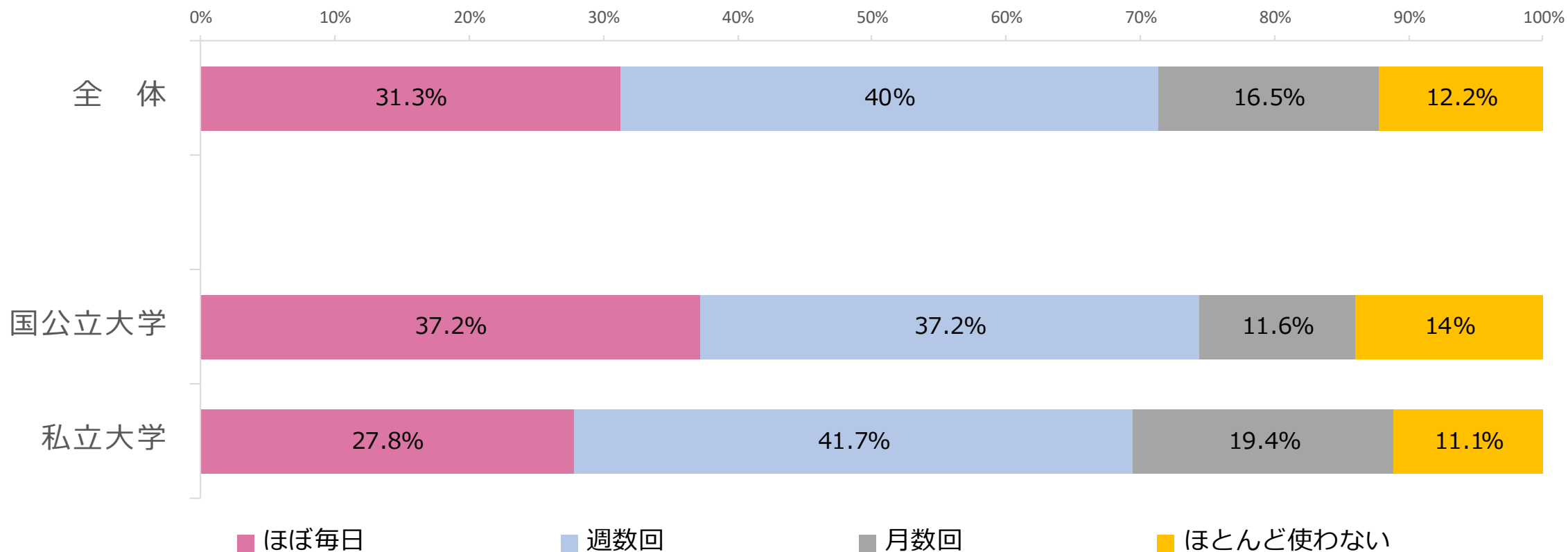
研究活動におけるAI利用率は91.3%と極めて高い。用途は「翻訳・英文作成」（60%）、「論文・資料の要約」（58.3%）、「文献検索・整理」（51.3%）が上位を占める。



# 調査結果

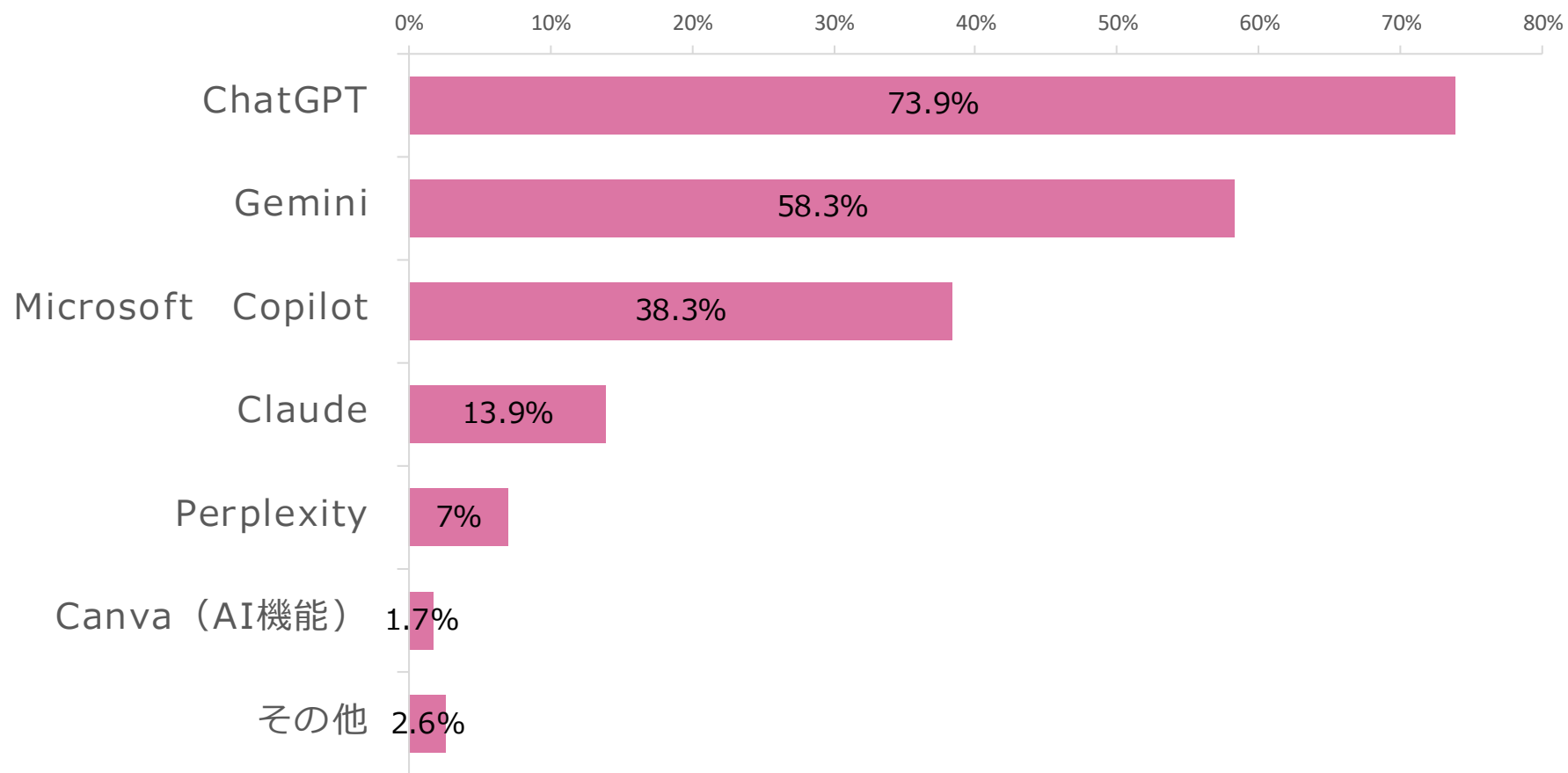
## 1-4. AIの利用頻度

「ほぼ毎日」と「週数回」を合わせると71.3%となり、7割以上の大学教員にとってAI利用が日常的になっていることがうかがえる。  
「ほぼ毎日」と答えた割合は、国公立大学の方が私立大学より高い。



## 調査結果 1-5. 利用しているAIサービス

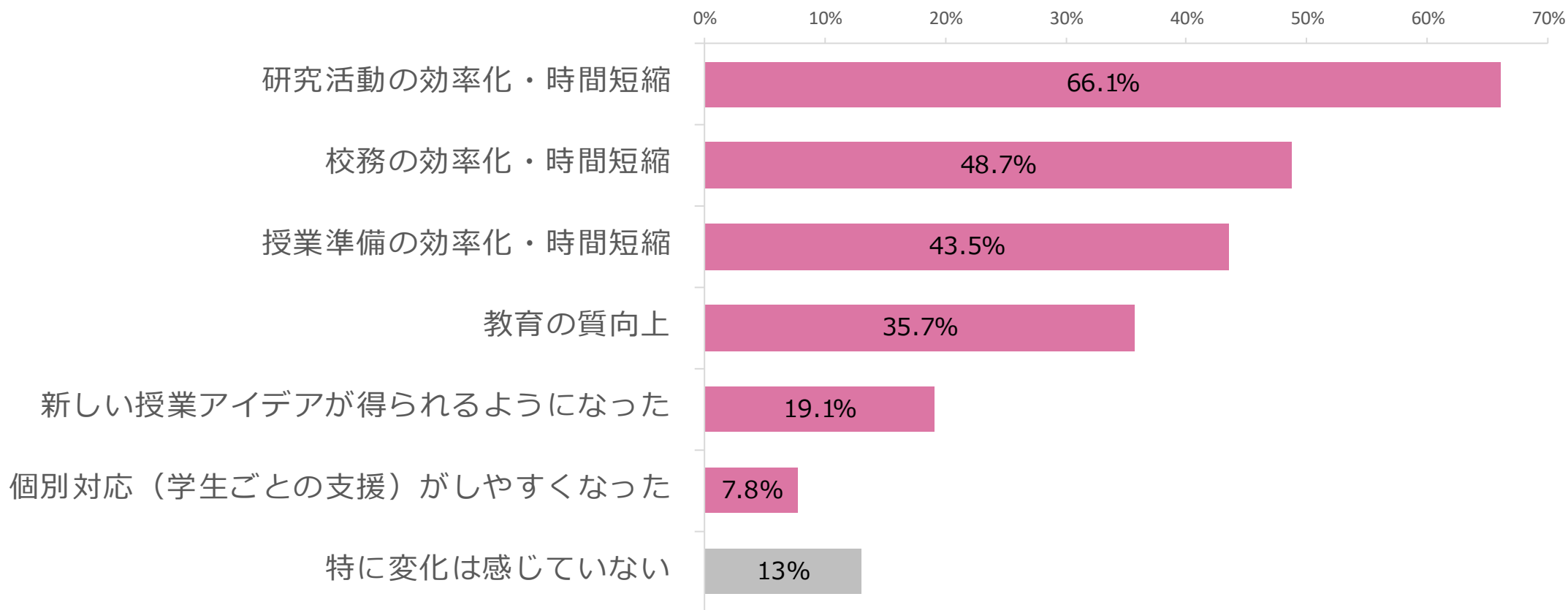
「ChatGPT」（73.9%）や「Gemini」（58.3%）が上位で主要ツールとなっている。



# 調査結果

## 1-6. 効果実感

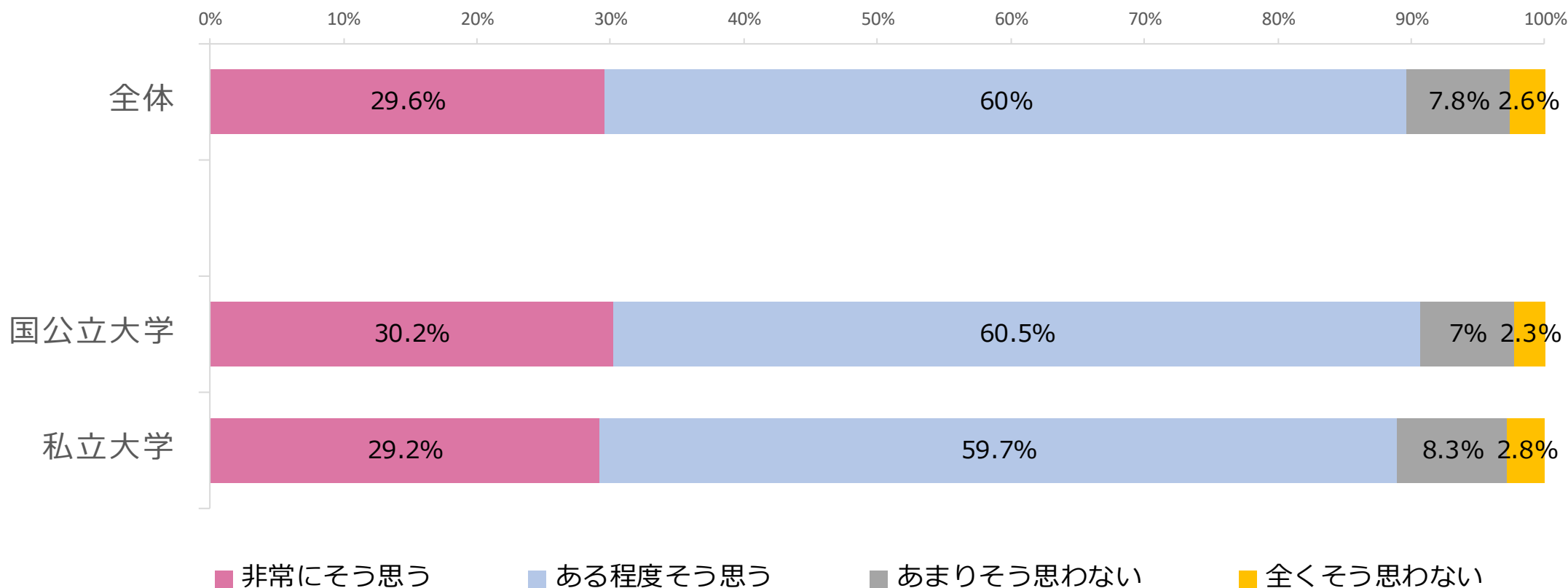
「特に変化は感じていない」は13%にとどまり、多くの大学教員がAI利用に効果を感じていることが読み取れる。とくに「研究活動の効率化・時間短縮」（66.1%）が最多である。



# 調査結果

## 1-7. 有用性

「非常にそう思う」と「ある程度そう思う」を合わせると89.6%となり、約9割の教員が大学教育にとってAIは有用だと考えていることがわかる。国公立大学と私立大学で大きな差はみられない。



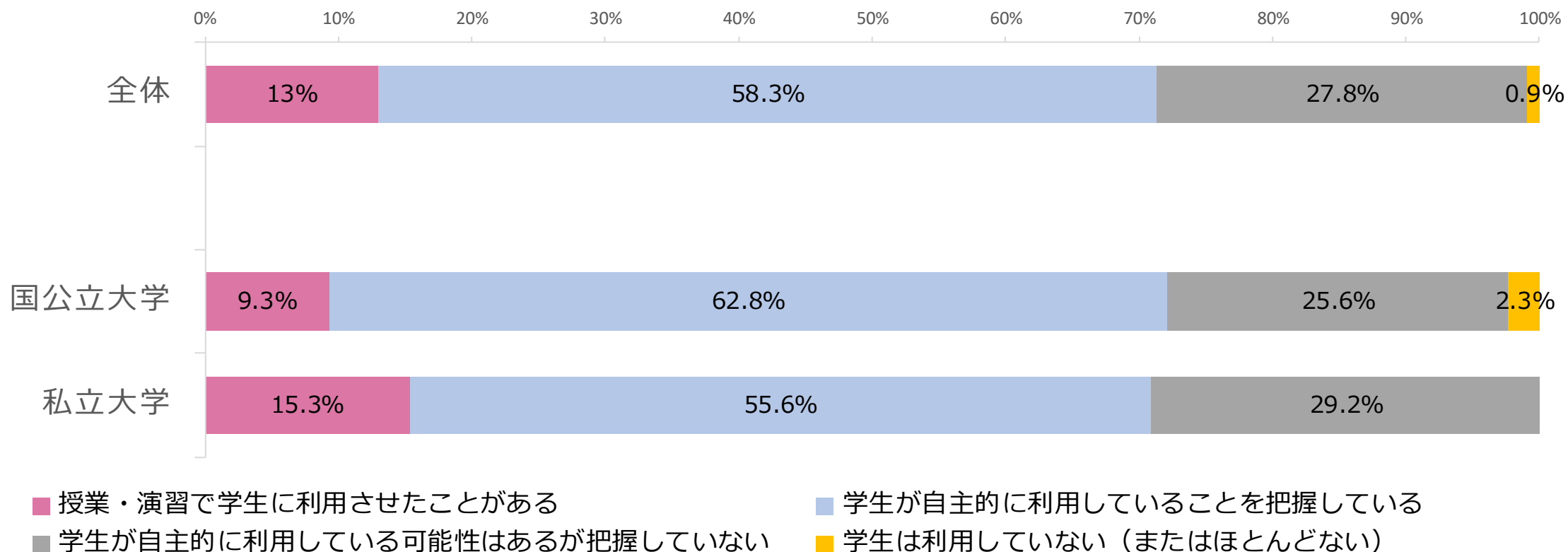
調査結果

## 2. 学生のAI活用

# 調査結果

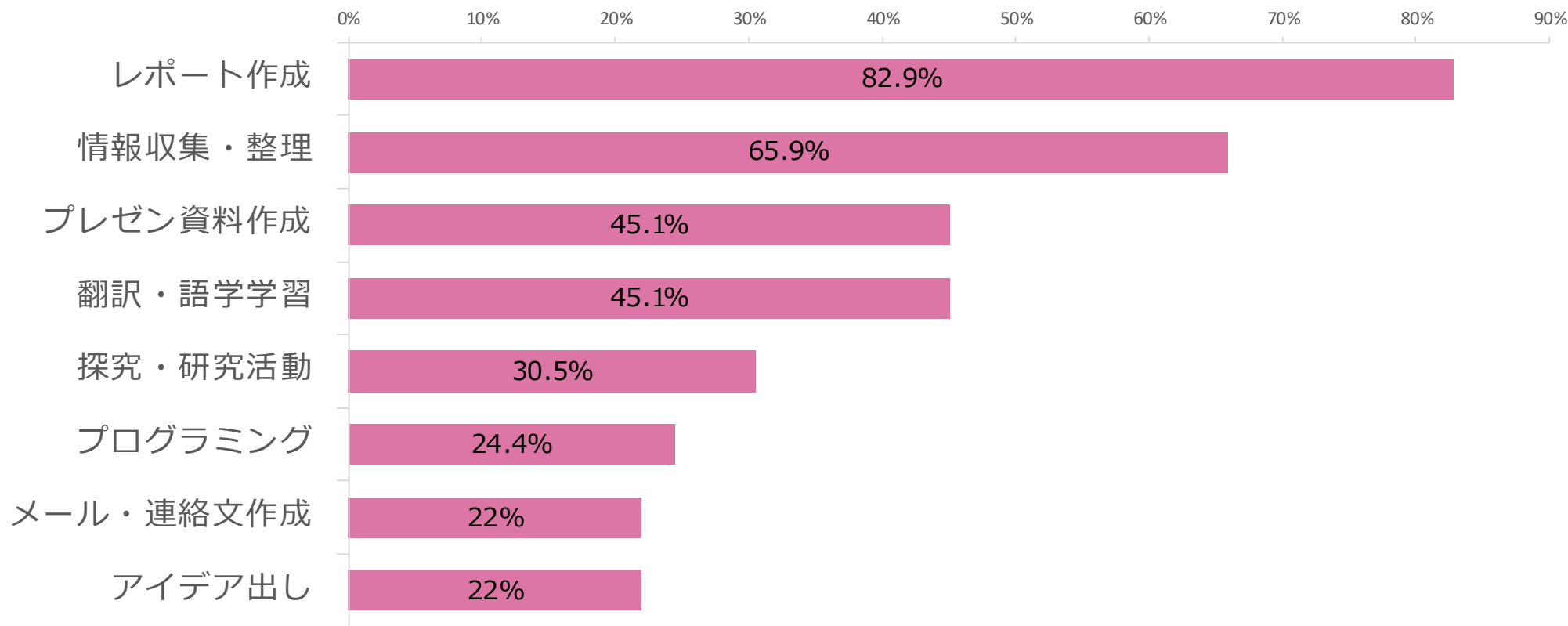
## 2-1. 学生のAI利用状況

学生のAI利用状況については、「学生の自主的利用を把握している」（58.3%）が最も多い。一方、「利用している可能性はあるが把握していない」も27.8%あり、学生のAI利用実態のすべてが把握されているわけではない状況がうかがえる。



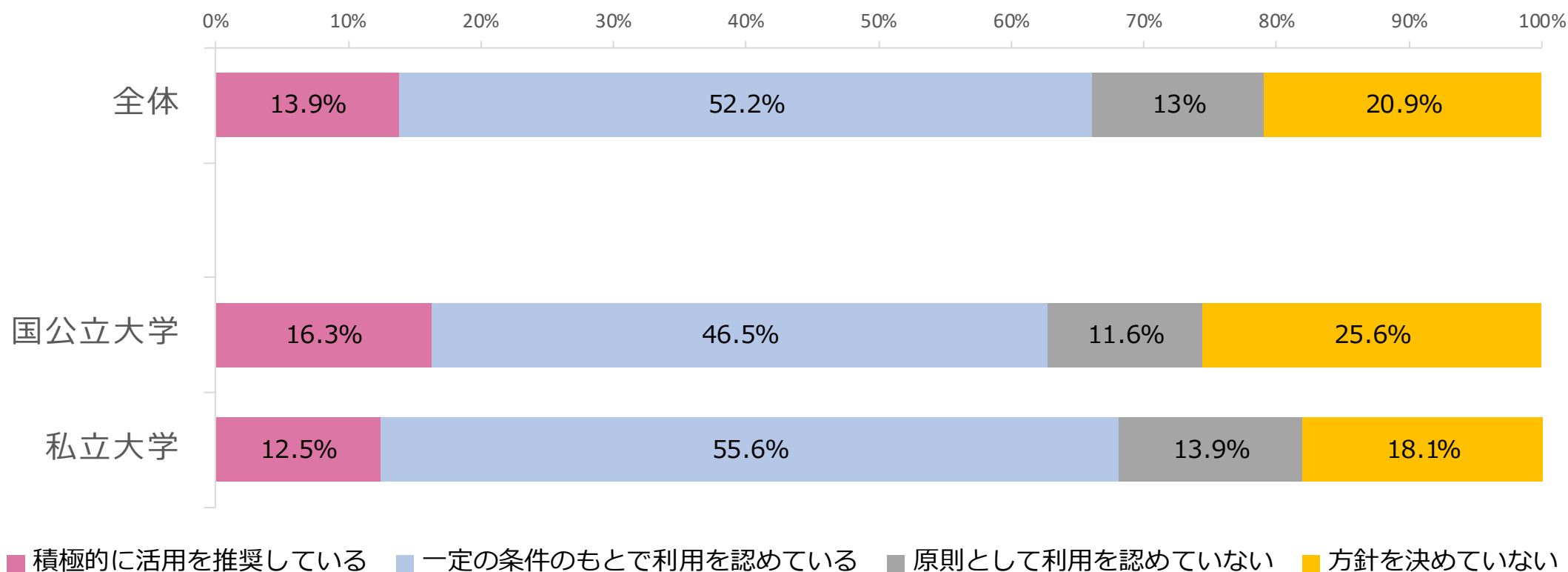
## 調査結果 2-2. 学生のAI利用用途

学生がAIを利用している用途としては、「レポート作成」が最多で82.9%に上る。次いで、「情報収集・整理」（65.9%）、「プレゼン資料作成」「翻訳・語学学習」（各45.1%）が続く。



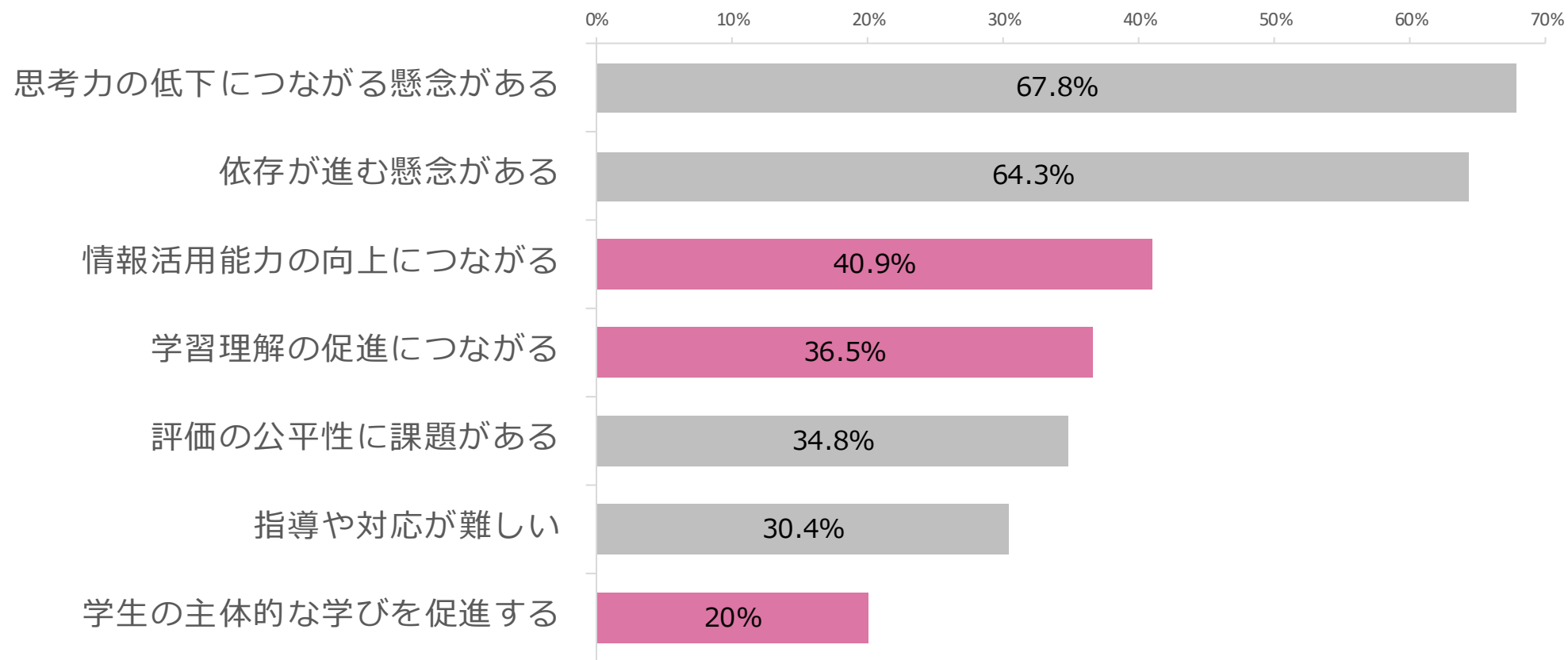
## 調査結果 2-3. 学生のAI利用に対する対応

学生のAI利用については「一定の条件のもとで利用を認めている」（52.2%）が最も多い。「積極的な活用を推奨」は13.9%である一方、20.9%は運用方針を定めていない。



## 調査結果 2-4. 学生のAI利用への評価

「思考力低下」(67.8%)や「依存」(64.3%)への懸念が多い。一方、「情報活用能力の向上」(40.9%)や「学習理解の促進」(36.5%)といった効果も期待されている。



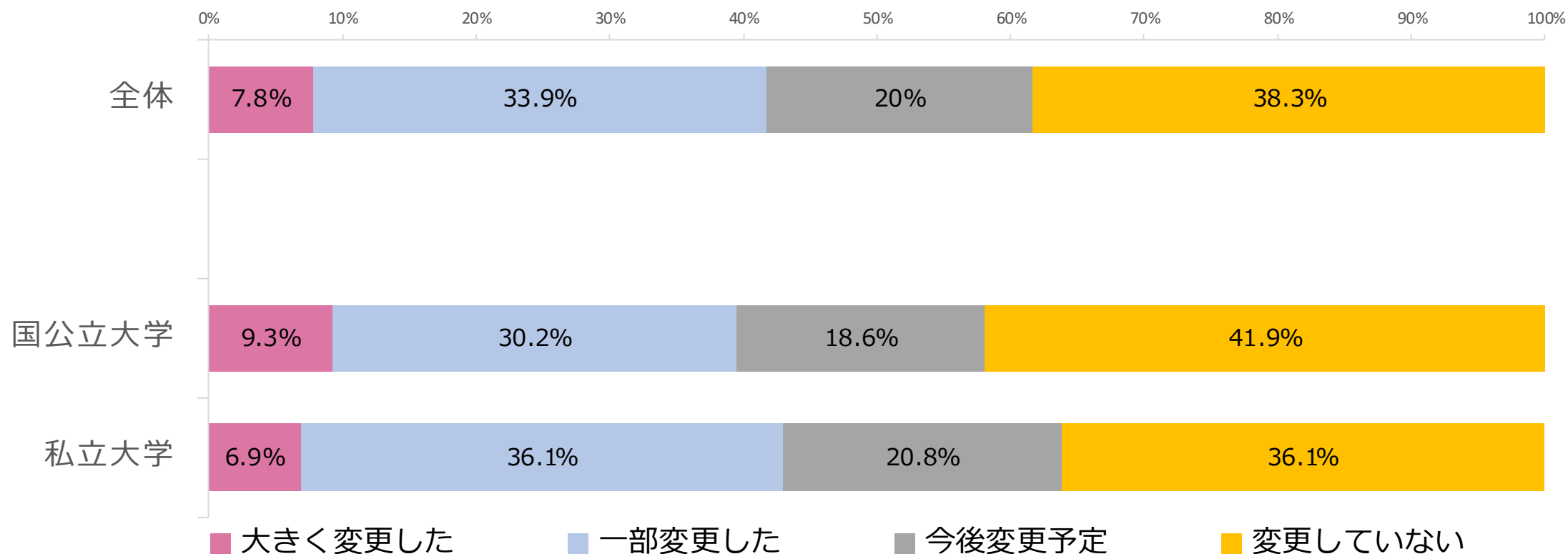
調査結果

3. 授業・課題・評価への影響

# 調査結果

## 3-1. 授業・課題・評価の変更

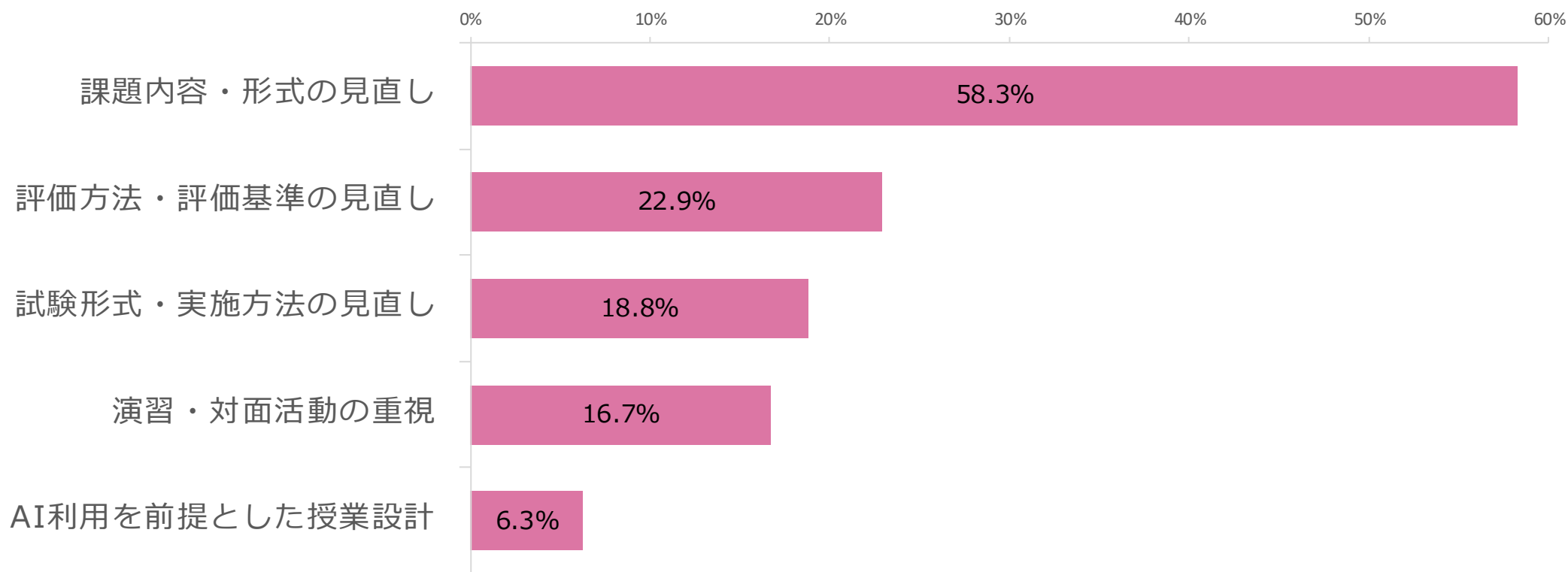
AIの普及によって授業・課題・評価方法を変更した教員は、「大きく変更」と「一部変更」を合わせると41.7%。  
「今後変更予定」（20%）を含めると、6割以上が変更済み、または今後の見直しを予定している。



# 調査結果

## 3-2. 授業・課題・評価の変更内容

変更内容は「課題内容・形式の見直し」（58.3%）が最も多い。次いで、「評価方法・評価基準の見直し」（22.9%）、「試験形式・実施方法の見直し」（18.8%）が続く。



### 1. 課題内容・形式の見直し

- AIをなるべく排除しやすい実測的な課題（国公立大学／理系教員）
- AIを使っても意味がないものに変更（国公立大学／理系教員）
- 課題の割合を減らして試験を課す（国公立大学／理系教員）
- その場で書かせる課題に移行（国公立大学／理系教員）
- レポートを課さないようになった（私立大学／文系教員）
- 自ら考え、書く作業の重視（私立大学／文系教員）
- AIに聞いても正解の出ない課題を出す（私立大学／理系教員）
- AIへの丸投げはできない課題（私立大学／理系教員）
- AI利用の場合はプロンプトを記録させる（私立大学／情報系教員）
- AIを使った場合には、その問いと回答を明記する（私立大学／医療系教員）
- どのようなプロンプトを使ったかを書かせている（国公立大学／理系教員）
- プロンプトも提出させるようにした（国公立大学／情報系教員）
- 結果より過程を重視（国公立大学／情報系教員）
- 授業コメントの形式を変更（私立大学／文系教員）
- 使用禁止（私立大学／文系教員）

※一部抜粋

### 2. 評価方法・評価基準の見直し

- AIの回答のコピーとみなされる場合は減点（国公立大学／文系教員）
- AIの誤りをそのまま鵜呑みにした解答は容赦なく減点（国公立大学／理系教員）
- コピーが明白なもの（私立大学／文系教員）
- 知識として記憶したものを重点的に評価（国公立大学／理系教員）
- 試験重視（国公立大学／理系教員）
- レポートより試験・面接重視（私立大学／理系教員）
- レポートを手書きに変更（私立大学／理系教員）
- 手書きのみ受付（私立大学／理系教員）

※一部抜粋

### 3. 試験形式・実施方法の見直し

- 難易度を上げた（国公立大学／理系教員）
- 課題の代わりに試験を増やす（国公立大学／理系教員）
- レポート提出ではなく対面試験での評価のみに切り替えた（国公立大学／理系教員）
- オンライン試験の制限（私立大学／情報系教員）
- AIでは回答できないような問題の作成（私立大学／文系教員）
- 問題の作り方（私立大学／医療系教員）

※一部抜粋

### 4. 演習・対面活動の重視

- ペア活動の重視（国公立大学／文系教員）
- AIを使うことを前提として、難易度を上げる（国公立大学／理系教員）
- AIに依存せず、考える力と発表する力を強化している（私立大学／文系教員）
- 対面で小テストを実施するようになった（私立大学／理系教員）
- 発言や発表、質疑を重視（私立大学／情報系教員）

### 5. AI利用を前提とした授業設計

- ライティングを授業内で実施（国公立大学／文系教員）
- 資料作成（私立大学／文系教員）
- PBL科目のブレインストーミングで活用（私立大学／情報系教員）

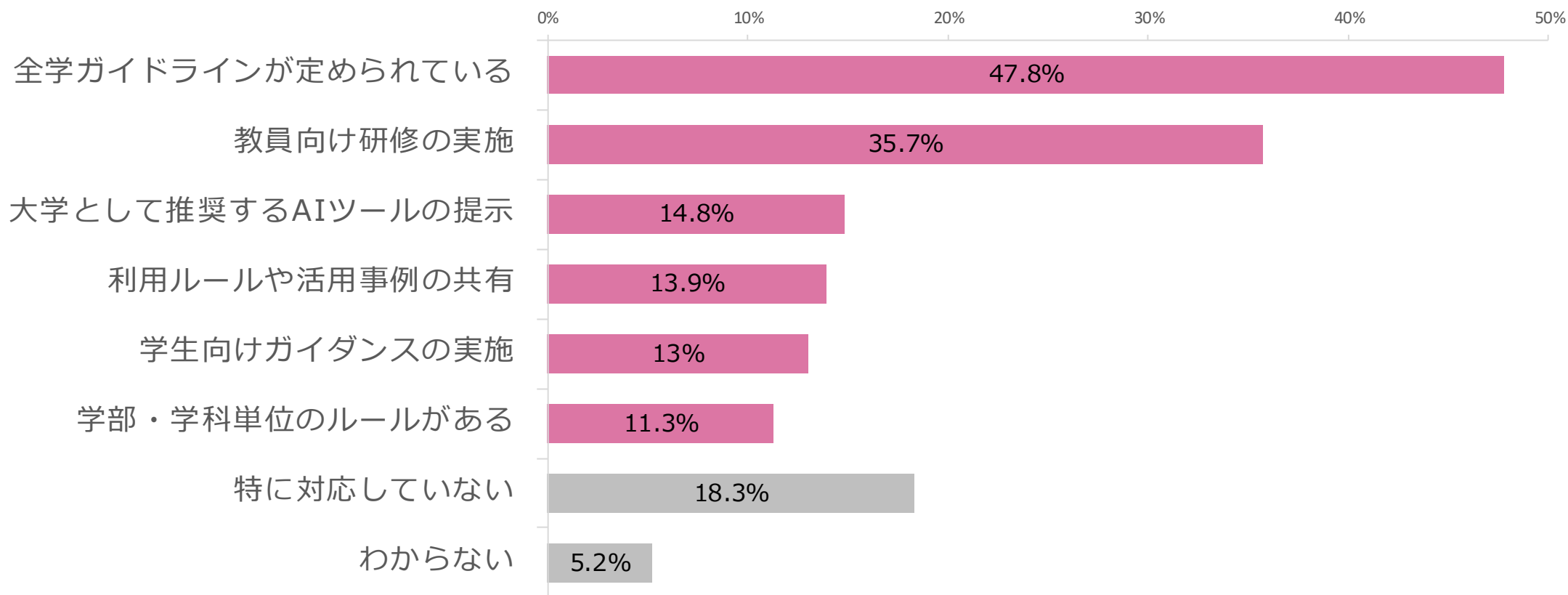
調査結果

## 4. 大学の運用体制

## 調査結果

### 4-1. 大学のAI利用ガイドライン

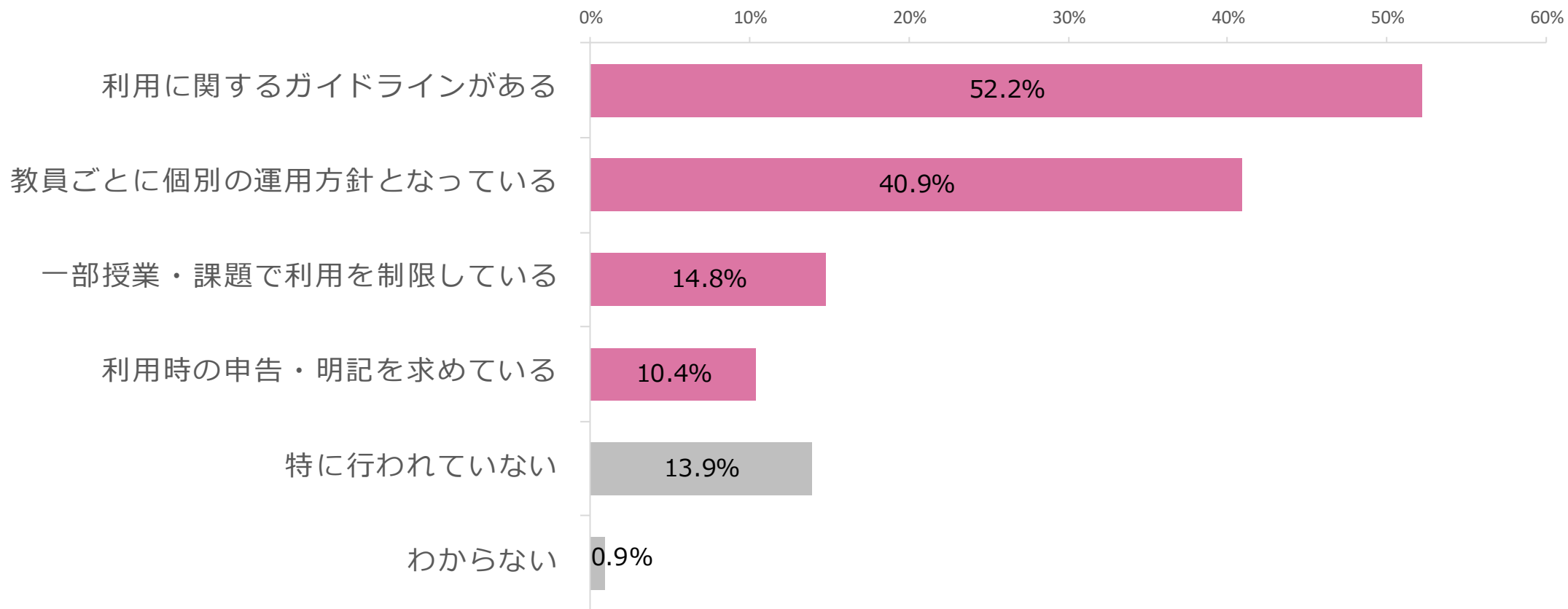
「全学ガイドラインが定められている」（47.8%）が最も多く、「教員向け研修の実施」（35.7%）が続いた。一方、「特に対応していない」も18.3%あり、大学によってAI活用への対応状況に差がみられる。



# 調査結果

## 4-2. 学生のAI利用に関する管理・運用

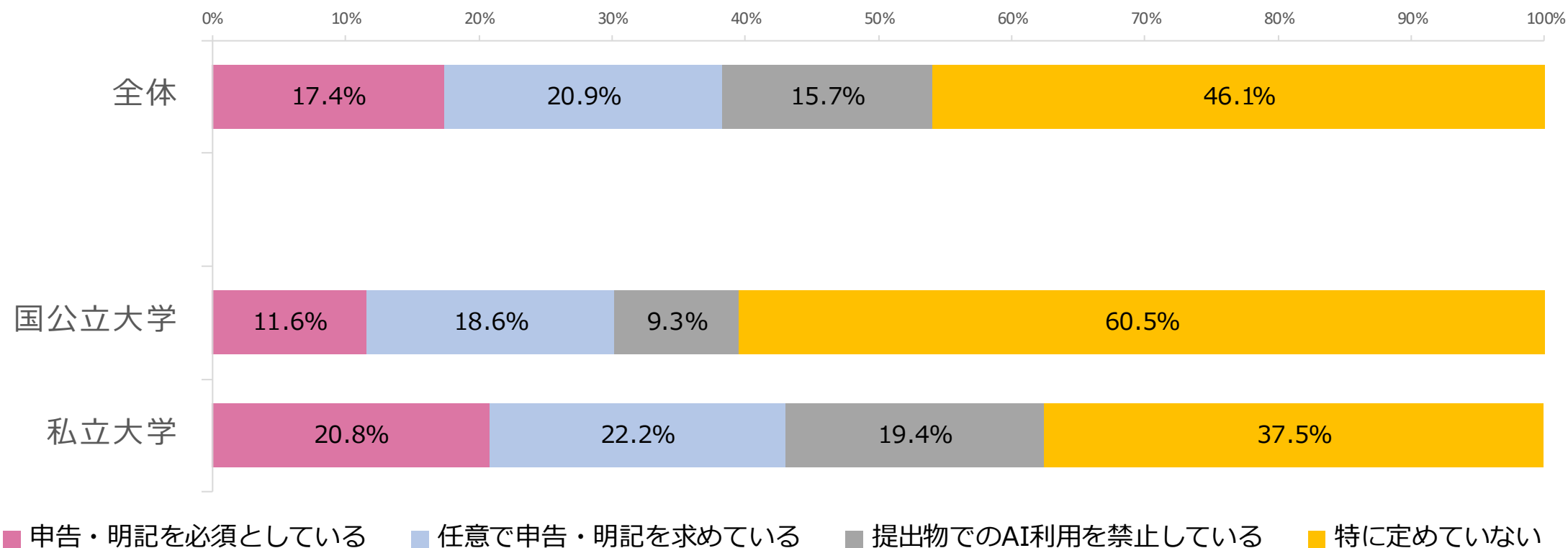
「利用に関するガイドラインがある」（52.2%）が最も多い一方、「教員ごとに個別の運用方針」も40.9%を占め、全学ルールと個別運用が併存していることがうかがえる。



# 調査結果

## 4-3. 学生によるAI利用時の申告・明記

AIを利用した場合の申告や明記は「特に定めていない」（46.1%）が最も多く、「申告・明記が必須」または「任意で求める」は合わせて38.3%となった。国公立大学では「特に定めていない」の割合が私立大学より高く、運用方法にばらつきがみられる。



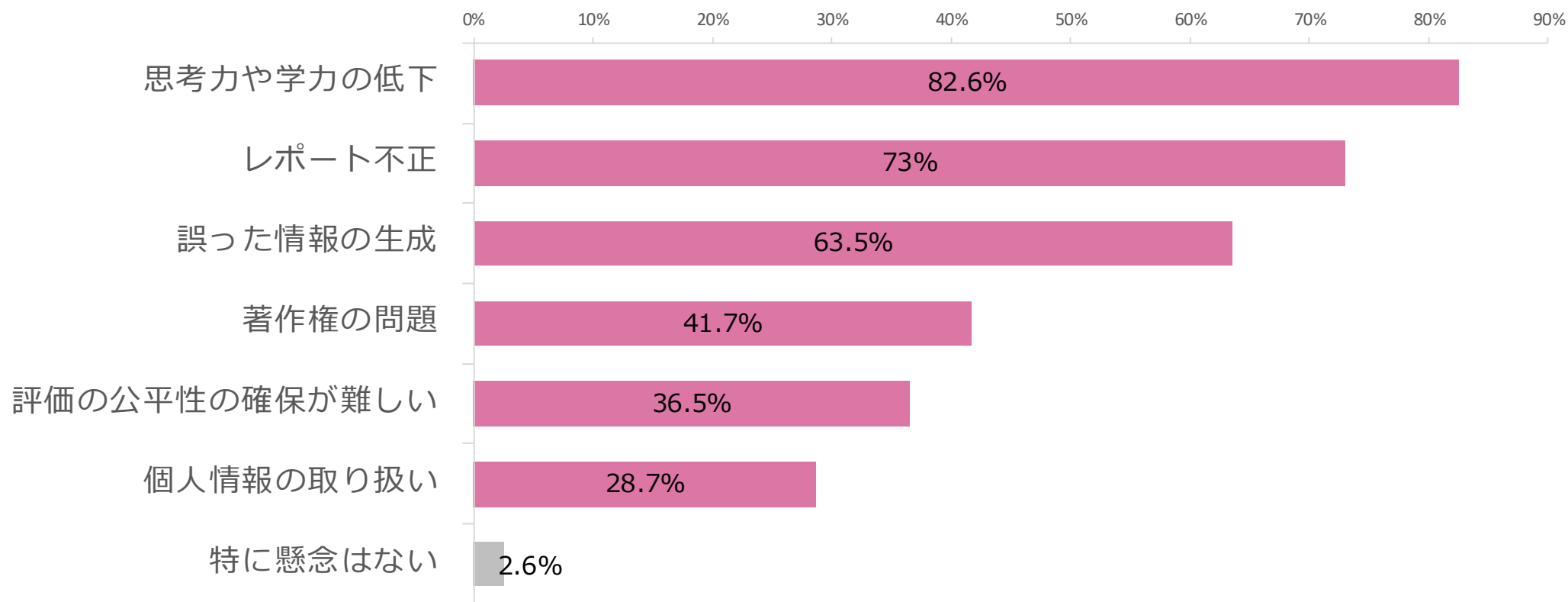
## 調査結果

### 5. 課題と求められる支援

# 調査結果

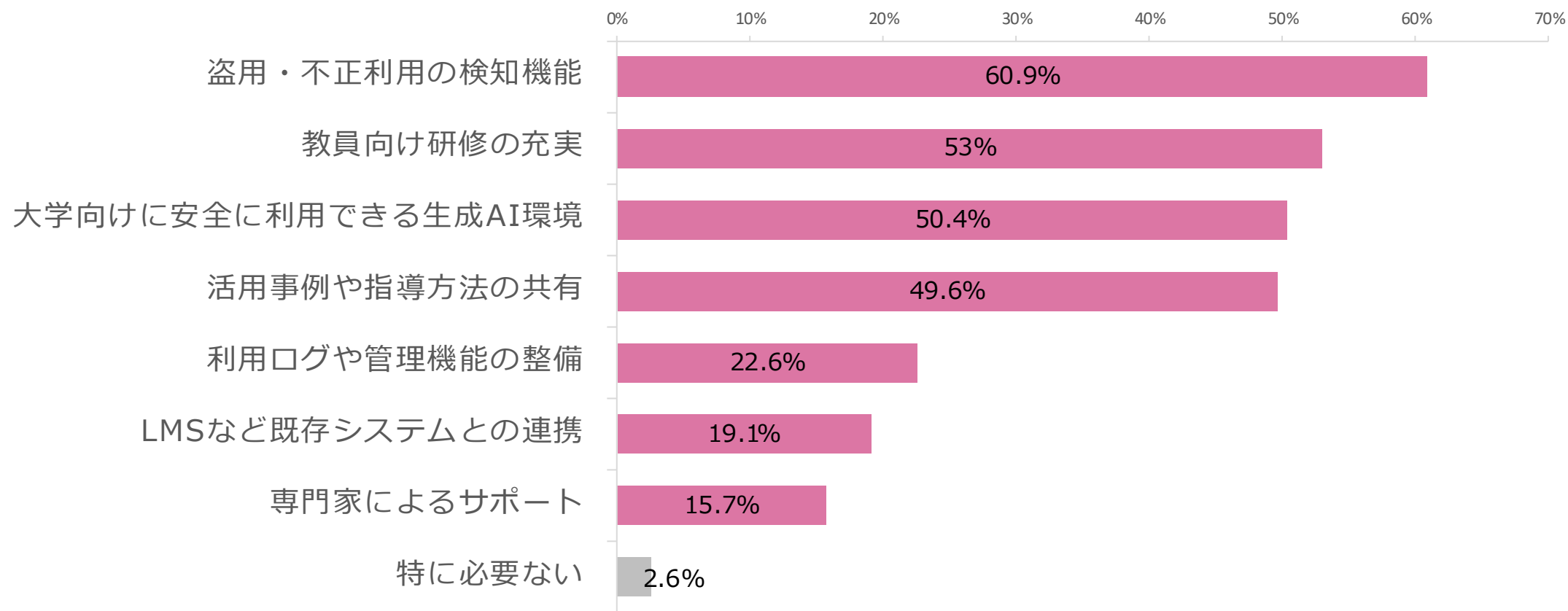
## 5-1. 懸念

AI活用にあたっては、「思考力や学力低下」（82.6％）への懸念が最も多い。次いで、「レポート不正」（73.0％）、「誤った情報の生成」（63.5％）となり、教育活動への影響に関する課題感が特に大きいことがうかがえる。



## 調査結果 5-2. 求められる支援

「盗用・不正利用の検知」(60.9%)が最多で、「教員向け研修」(53%)、「大学向けに安全に利用できるAI環境」(50.4%)、「事例や指導方法の共有」(49.6%)が続いた。AIを安心して活用するための環境整備と教員支援の両面が求められている。



## 調査結果

### 5-3. AI活用における課題（自由記述）

自由記述では、「ルール整備・リテラシー教育」に関する意見のほか、「不正利用・AI利用の判別」「評価の難しさ」「学生の思考力・依存への懸念」など、教育現場での運用や指導に関する課題が多く挙げられた。

| 分類              | 主な内容                                       |
|-----------------|--------------------------------------------|
| ルール整備・リテラシー教育   | AIの利用範囲やルール、ガイドライン、指導方法・運用方針の整備に関する意見      |
| 不正使用・AI利用の判別    | レポート等でのAI利用や剽窃・コピーの判別、不正利用やカンニングへの対応に関する意見 |
| 評価の難しさ          | AI利用を踏まえた学習成果や理解度、公平性を考慮した成績評価・評価方法に関する意見  |
| 学生の思考力・依存への懸念   | 学生の思考力・学力・批判的思考力の低下、AIへの依存や情報を鵜呑みにすることへの懸念 |
| AIの精度・出力内容への懸念  | 誤情報や不正確な回答、生成内容の信頼性・正確性に関する意見              |
| セキュリティ・著作権・個人情報 | 個人情報・機密情報の漏洩や著作権・知的財産権などのリスクに関する意見         |
| その他             | 生成AIの急速な進展への対応、課題・授業設計の見直しなど、上記に分類されない意見   |

### 1. ルール整備・リテラシー教育

- ルール整備が課題（私立大学／理系教員）
- ルールの整備が追いついていない（私立大学／理系教員）
- 使いこなしてもらいたいが丸投げは困る。そのためのルールをどう設定するのがいいのか悩んでいる（私立大学／文系教員）
- 利用を可とする範囲の設定（国公立大学／文系教員）
- 指導方法が統一されていない（国公立大学／情報系教員）
- 学生に対する利用方法の徹底（国公立大学／理系教員）
- 学校自体のルール作成がないので困る。また内容自体を学生が精査できないのも問題（私立大学／医療系教員）
- ガイドラインこそあるが、個人の自由に任せられている（私立大学／医療系教員）
- ルール作成とリテラシー教育（私立大学／医療系教員）
- 就職活動、例えば履歴書やエントリーシートへの活用について。勧めたほうが良いのかどうか、迷うところ（私立大学／文系教員）
- 結果を学生がきちんと評価できるかどうかの指導が不足している（私立大学／文系教員）
- 学生が普段の勉強の相棒として生成AIを利用することには大きな懸念はない。学生ら複数人で相談しながら勉強するのとほぼ同列と考えている。ただ、その成果物や試験を教員が自身の目・手・頭を使って評価することが、最終的に大切。学生らには、生成AIの弱点・欠点を理解した上で、「コピペ」することが勉強ではないことを忘れないで欲しい（私立大学／医療系教員）
- 使用すると言っても学生は使用する。であれば使用を認めるが内容を精査するよう指導している。しかし、教員が読めば何も精査していないことが一目瞭然である。賢い学生が利用する分には有効であるが、そうで無い学生が使用すると、ますますレベルが下がる（私立大学／医療系教員）

※一部抜粋

### 2. 不正利用・AI利用の判別

- 生成AIを使ったかどうかの真偽（国公立大学／医療系教員）
- 学生がレポート課題や研究において生成AIに丸投げし、出力結果をコピー＆ペーストすること（私立大学／文系教員）
- レポートをAIで作成してくるので困っている（私立大学／文系教員）
- 活用しているのに「活用していない」と言い張る学生の存在（私立大学／文系教員）
- 指導しても規則があっても使う学生は使うし、それをすべて教員が見抜くことはできない（国公立大学／文系教員）
- 学生が生成AIを使っているかどうか判断できないので、すべての学生を疑いの目で見てしまう（私立大学／理系教員）
- レポートの不正を防げない（私立大学／理系教員）
- 剽窃（国公立大学／文系教員）
- 本当に自分で書いたものかどうかの判断が非常に難しい（国公立大学／文系教員）
- レポートの内容が自身の発想なのか、どんどんわかりにくくなっている。なんとかAIの入る余地をなくすような課題設定の工夫を考えないといけない（国公立大学／理系教員）
- カンニングに使われる。非常に問題。（私立大学／文系教員）
- 真偽を確認せずに、AIレポートそのままを、さも自分が作成したかのように提出してくる。内容を読めば、大体はAIか否かは判別できるが、それがまかり通れば、記憶にも残らず、クリック→ペーストで5分でレポートが完成することに課題の意味はないように思う（私立大学／医療系教員）
- 学生のAI利用が、どの程度課題レポートに影響しているか、判断ができてにくい。（私立大学／医療系教員）
- 原則的にレポート提出の意味がなくなってしまった。（私立大学／医療系教員）

※一部抜粋

### 3. 評価の難しさ

- 成績評価の仕方（国公立大学／文系教員）
- 評価が難しい（国公立大学／文系教員）
- 使っている学生と使っていない学生の差の評価（国公立大学／情報系教員）
- 使用している学生とそうでない学生をどのように公平に評価するか（国公立大学／理系教員）
- 公平な評価がしにくい（国公立大学／理系教員）
- 有料版を使用できる金銭的余裕のある学生が有利なこと（国公立大学／理系教員）
- 有料サービスを利用できるか否かによる学生間の経済的格差（私立大学／文系教員）
- 課題におけるAI利用を制限しなければ学力低下は免れないが、禁止すればするほど課題採点の公平性を保てない（国公立大学／理系教員）
- 本人がどこまで理解してるかの判断が難しい（国公立大学／理系教員）
- 評価（国公立大学／理系教員）
- 評価が難しい（国公立大学／情報系教員）
- 評価方法（私立大学／文系教員）
- ツール使用に伴う不平等性を感じる（私立大学／文系教員）
- 評価は確かに難しい（私立大学／理系教員）
- レポート内容の評価（私立大学／医療系教員）

※一部抜粋

### 4. 学生の思考力・依存への懸念

- 批判的思考力の低下（国公立大学／文系教員）
- 学生がなんでもAIに聞いてちゃんと勉強していない（国公立大学／理系教員）
- 学生の過度の依存が懸念であり、教員がそれを助長するようなことはあってはならないが、講義資料にAI名が明記されている等、懸念なく使用する例が散見され困難な状況である（国公立大学／理系教員）
- AIに頼り切って中身を精査していない（私立大学／文系教員）
- 教員も学生も、依存しすぎないようにしないといけない（私立大学／文系教員）
- 時間をかけて考えることがおろそかになりそうである（私立大学／文系教員）
- 学生の論理的思考力の低下、安易な課題作成（私立大学／理系教員）
- 学生の思考力低下（私立大学／情報系教員）
- 自分で考えなくなっている（私立大学／医療系教員）
- 学力低下（私立大学／医療系教員）
- 学生がAIの誤りに無批判であること（国公立大学／理系教員）
- AIの回答をうのみにする学生が増える問題（私立大学／理系教員）
- 学生が間違った情報を判断できない（私立大学／理系教員）
- 正しい参考文献や情報が判断せずに使う学生の増加が既に発生しているので、学生への使用指導の難しさ。学生の思考力低下を如何に防止するか（私立大学／理系教員）

※一部抜粋

### 5. AIの精度・出力内容への懸念

- 間違った理解がたまにある（国公立大学／理系教員）
- 誤情報の識別が難しい（私立大学／文系教員）
- 想定外の不必要な回答が目立つ。（私立大学／文系教員）
- 専門になるといい加減な答えをすることが少なくない（私立大学／文系教員）
- 解法が間違っている事がある（私立大学／理系教員）
- 生成された内容の正確性をどこまでどのように表現するかでやや思案しています（私立大学／理系教員）

### 6. セキュリティ・著作権・個人情報

- 安全性（国公立大学／理系教員）
- 著作権、個人情報の漏洩（国公立大学／理系教員）
- 個人情報の漏洩が起きないか心配している（国公立大学／理系教員）
- 機密情報保護（国公立大学／情報系教員）
- 個人情報の漏洩、著作権侵害などのリスクの周知が浸透していない可能性あり（私立大学／情報系教員）
- 生成したものが他者の知的財産権を侵害していないか判断が難しい（私立大学／情報系教員）

### 7. その他

- 課題の回答をAIを使えないようなものにするにはどうすればいいか（国公立大学／医療系教員）
- 不正をする学生をだます問題を作成するのが時間の無駄である。大学に要望出しても、一切聞き入れてくれない（私立大学／文系教員）
- 語学教育において、どのような能力を育成すべきか、対応を考えている（私立大学／文系教員）
- 状況がどんどん変わっていくため、対応し切れていない（国公立大学／理系教員）
- 生成AIの急激な進展・情報への具体的な対応の難しさ（私立大学／文系教員）
- 生成AIを排除することができないので、対策と改善を考えて対応するしかできないと思う（私立大学／文系教員）
- どんどん進化するため、困惑している（私立大学／理系教員）
- 授業の資料を作成するのが楽になった（私立大学／医療系教員）
- 特に認識していないが、今後問題が整理されると思う（国公立大学／医療系教員）

調査結果

## 6. AI活用成熟度分析

# 調査結果

## 6. AI活用成熟度分析

ここまでの調査結果を踏まえ、大学におけるAI活用成熟度を4段階に分類し、活用実態・効果・課題・必要支援の違いを分析した。

| 成熟度         | 概要                                                    |
|-------------|-------------------------------------------------------|
| Lv1：教員未活用段階 | 教員が校務・授業準備・研究活動のいずれでもAIを利用していない                       |
| Lv2：限定導入段階  | 教員が校務・授業準備・研究活動のいずれかでAIを利用しているが、ルールやガイドラインは整備されていない   |
| Lv3：ルール整備段階 | 学生のAI利用に関するルールや大学としてのガイドライン・運用方針が整備されている              |
| Lv4：組織運用段階  | 大学としてのルールやガイドラインの整備に加え、AI利用を前提とした授業・課題・評価の見直しが実施されている |

### 【本調査における成熟度定義】

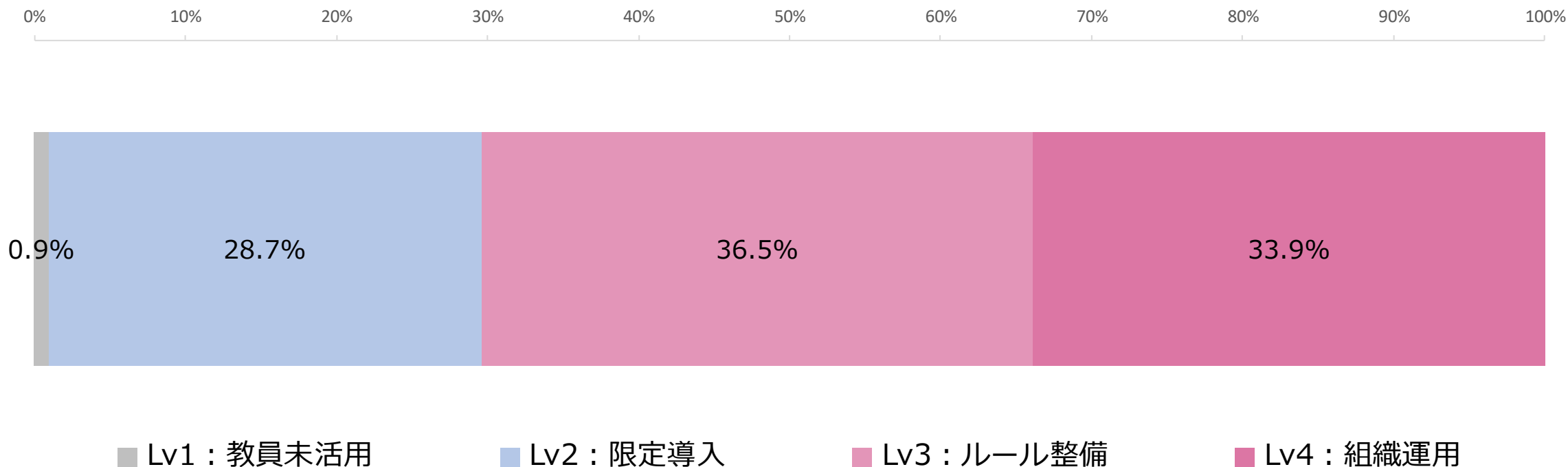
成熟度は、教員による校務・授業準備・研究活動でのAI利用に加え、授業・課題・評価方法の変更、学生利用ルール、大学としての対応に関する6設問をもとに分類した。なお、本調査における成熟度は、大学全体のDX成熟度ではなく、AIの活用・運用状況を把握するための指標である。

※Lv1は教員自身が生成AIを利用していない層を示すが、学生の生成AI利用への対応として授業や評価方法を変更している教員も含まれる。

# 調査結果

## 6-1. AI活用成熟度の構成比

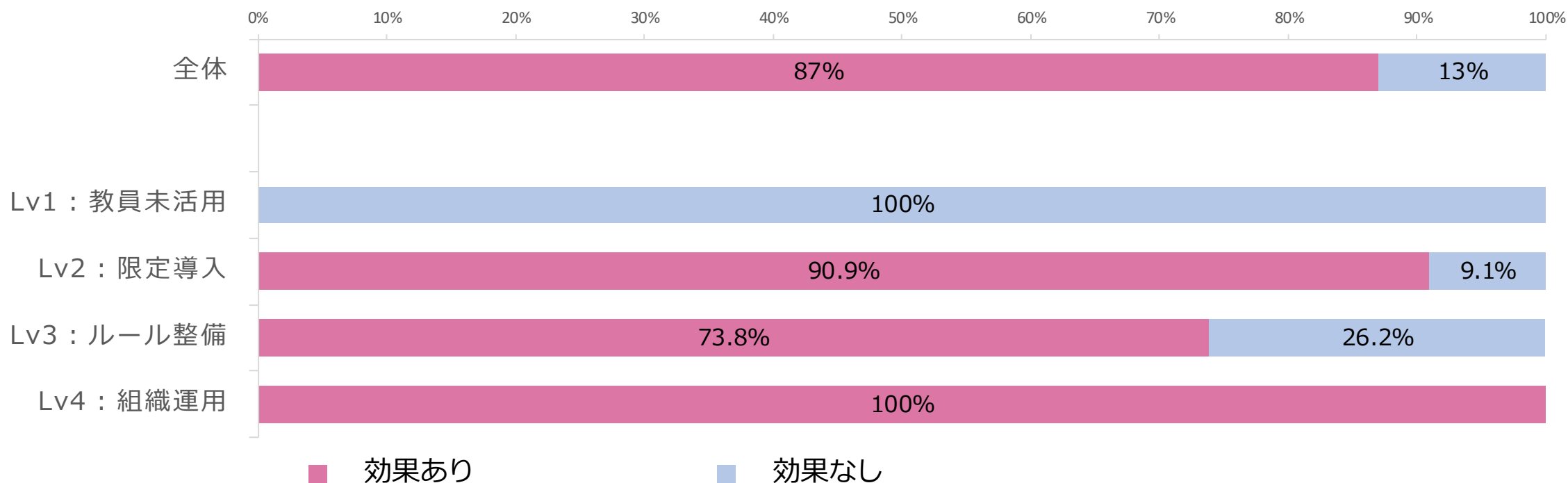
AI活用成熟度はLv2・Lv3・Lv4がそれぞれ約3分の1を占める一方、約7割はルール整備以上の段階に達しており、大学における組織的なAI活用が進みつつあることがうかがえる。



# 調査結果

## 6-2.【分析】AI活用成熟度×効果実感

組織運用段階（Lv4）では100%が効果を実感しており、成熟度が高い層では効果実感が高い結果となった。

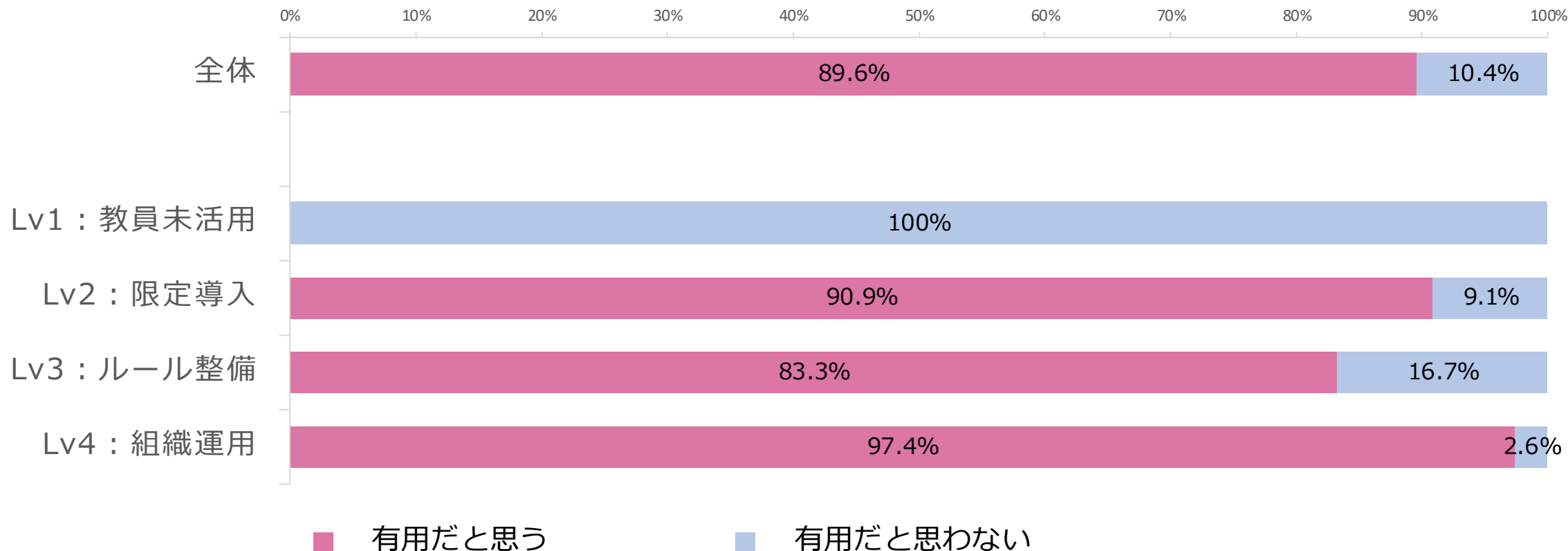


※Lv1はサンプル数が少ないため参考値

# 調査結果

## 6-3.【分析】AI活用成熟度×有用性

組織運用段階（Lv4）では97.4%がAIを有用と回答しており、AIを有用と評価する割合が特に高い結果となった。

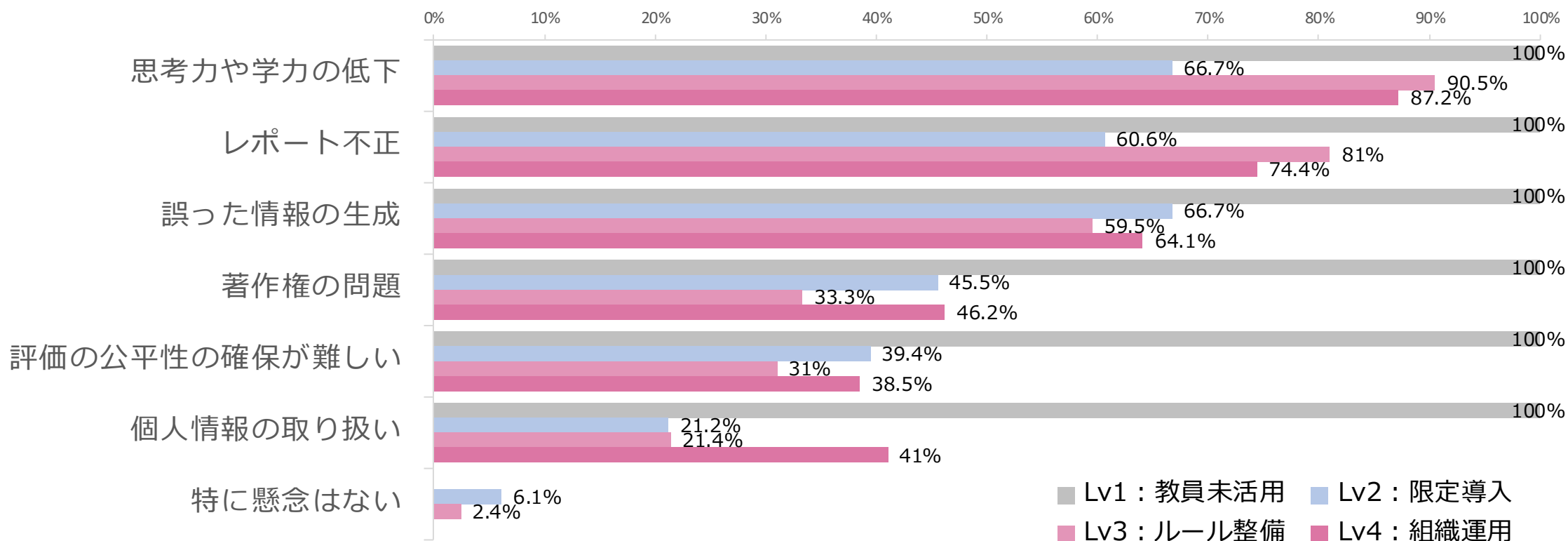


※Lv1はサンプル数が少ないため参考値

# 調査結果

## 6-4.【分析】AI活用成熟度×懸念

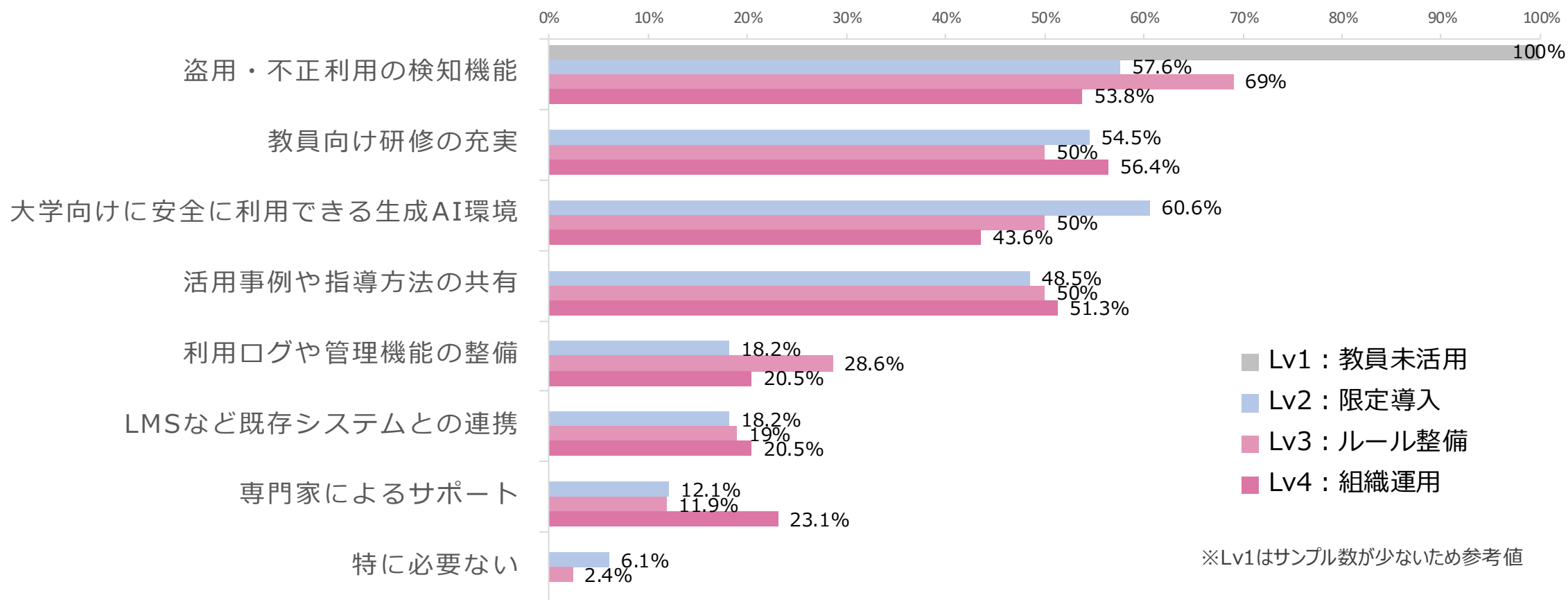
活用初期段階では「学力低下や思考力への影響」への懸念が高い一方、組織運用段階（Lv4）では「個人情報の取り扱い」や「著作権の問題」など実際の運用に関する課題への関心が高まる傾向がみられる。



※Lv1はサンプル数が少ないため参考値

## 調査結果 6-5.【分析】AI活用成熟度×必要支援

AI活用成熟度が高まるにつれ、「利用ログや管理機能の整備」「LMSなど既存システムとの連携」など、実運用を支える支援への関心が相対的に高まる傾向がみられた。



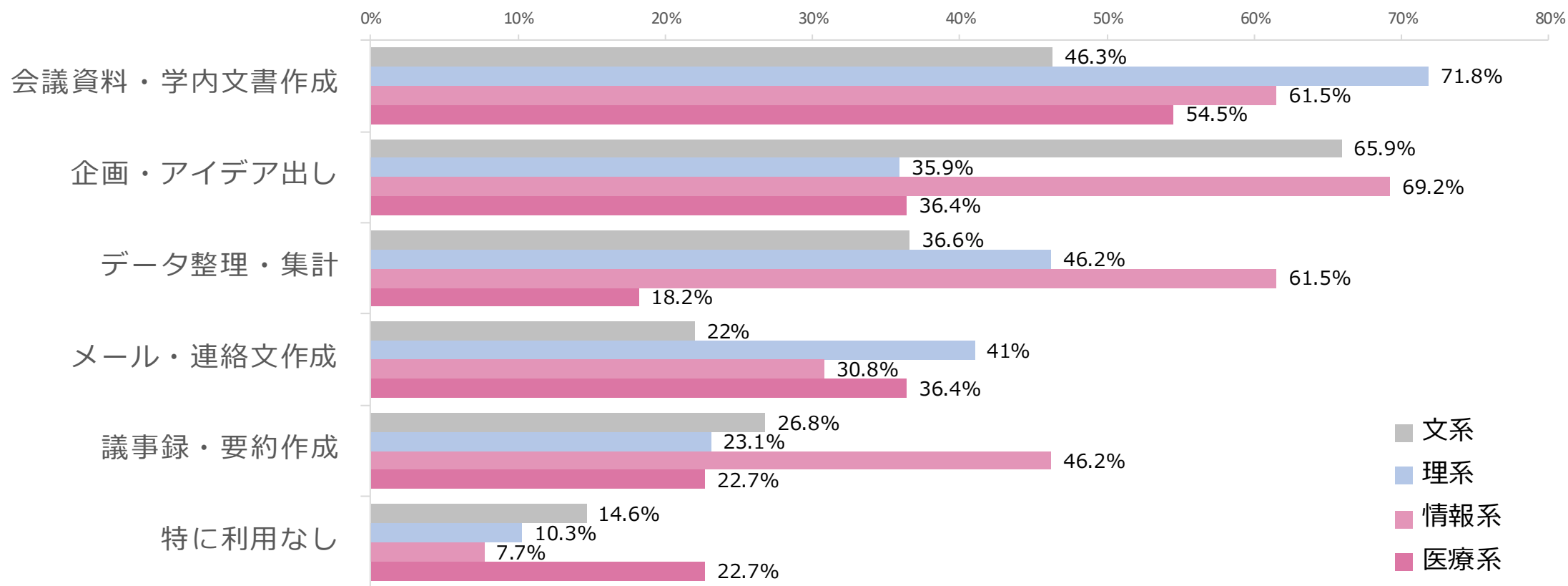
調查結果

## 7. 專門分野別分析

# 調査結果

## 7-1.【分析】専門分野×校務におけるAI利用用途

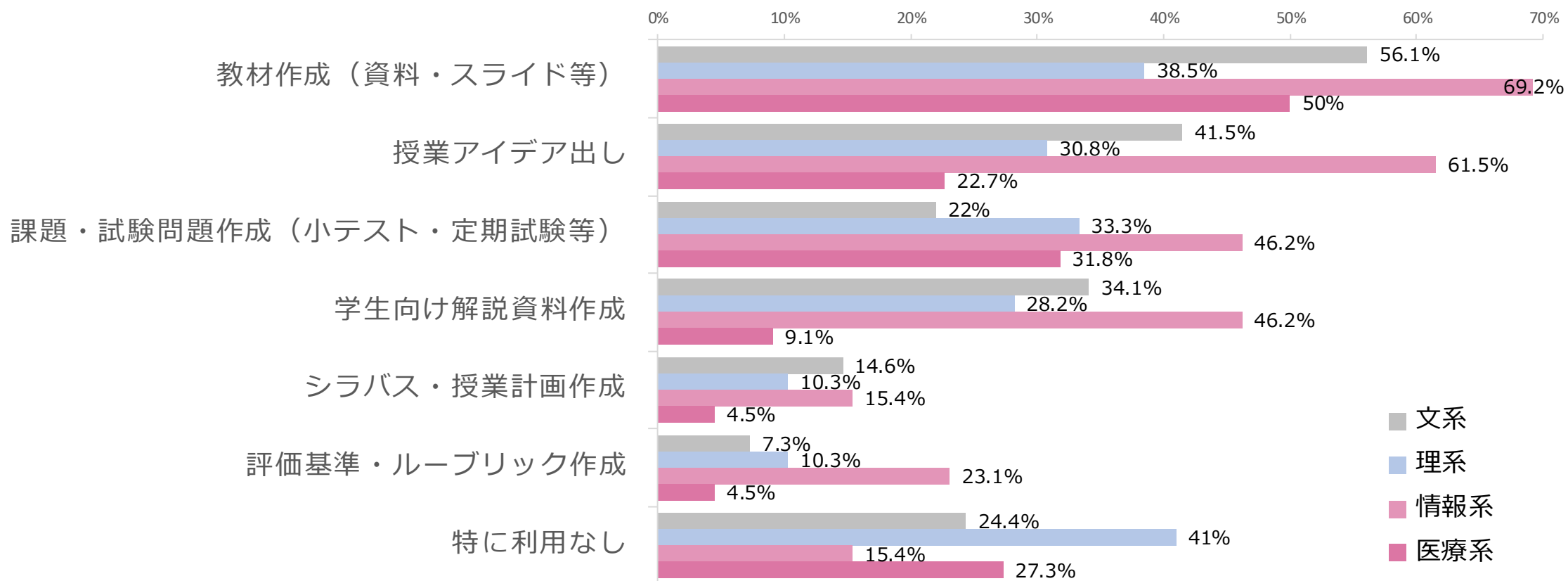
本章では、回答者を専門分野別に分類し、AI活用の特徴を分析した。校務でのAI利用用途は専門分野による違いがみられ、理系では「会議資料・学内文書作成」、情報系では「企画・アイデア出し」や「データ整理・集計」の割合が高かった。



# 調査結果

## 7-2.【分析】専門分野×授業準備におけるAI利用用途

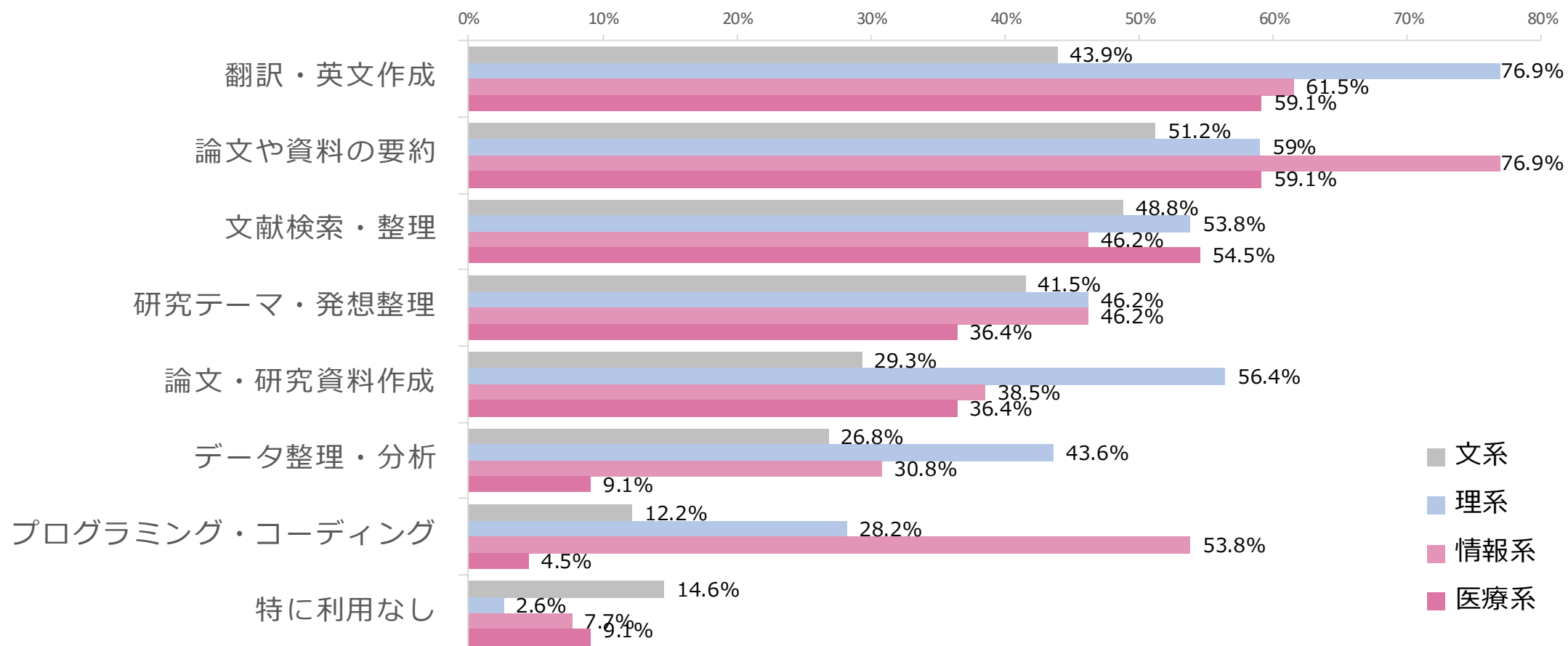
授業準備では、「教材作成」や「授業アイデア出し」、「課題作成」などにおいて情報系の利用割合の高さが目立つ。一方、理系では「特に利用なし」の割合が比較的高い傾向がみられる。



# 調査結果

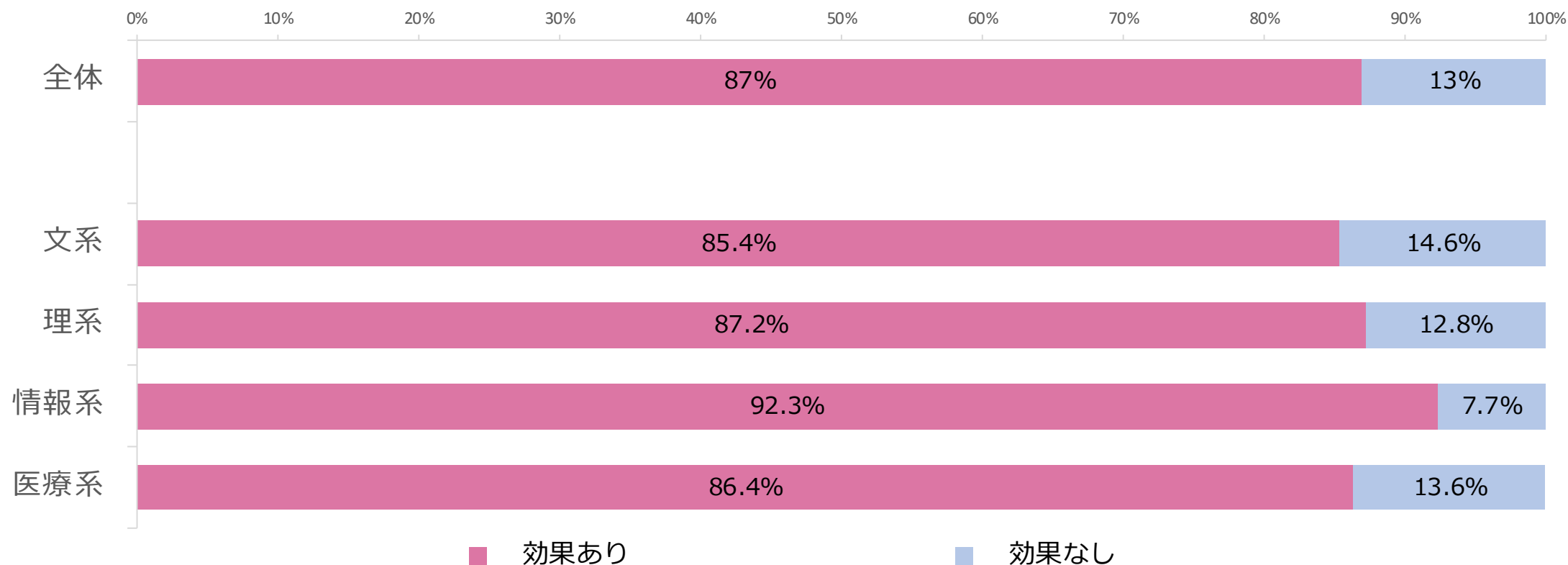
## 7-3.【分析】専門分野×研究活動におけるAI利用用途

研究活動では、理系の「翻訳・英文作成」、情報系の「論文や資料の要約」や「プログラミング・コーディング」の利用割合が高く、それぞれの研究スタイルに応じた活用が進んでいることがうかがえる。



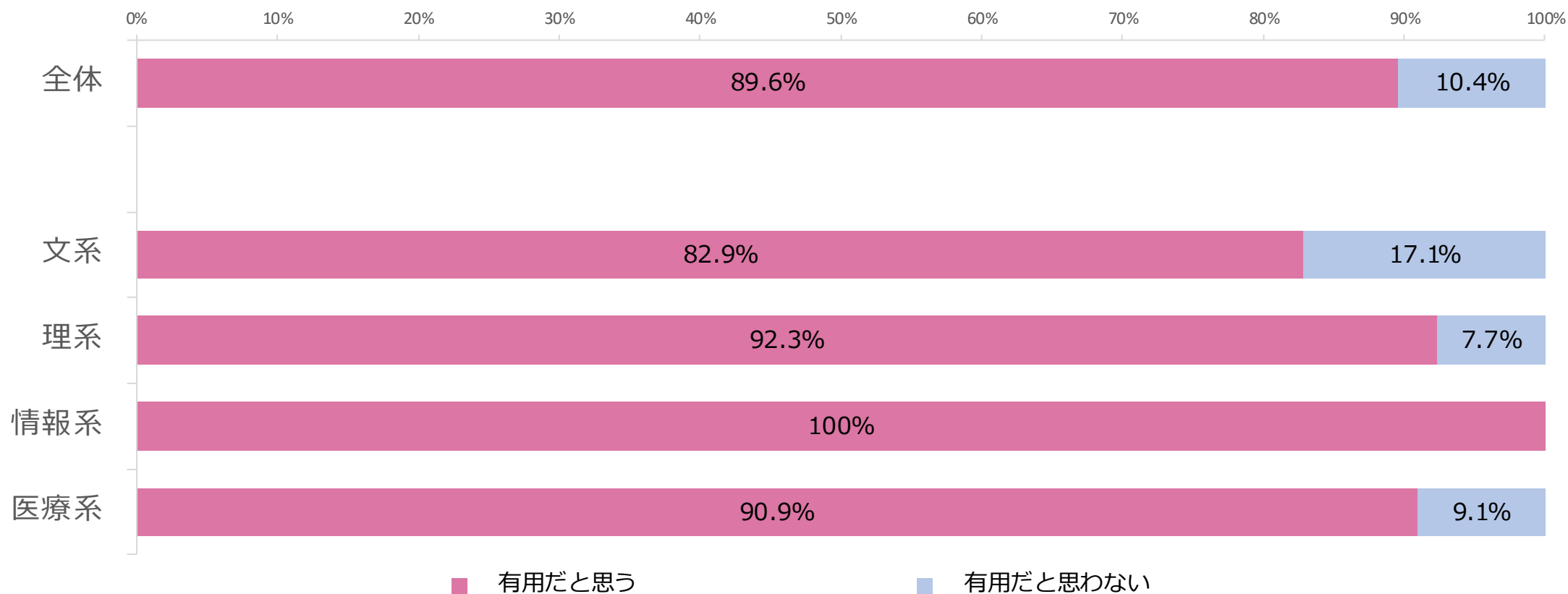
## 調査結果 7-4.【分析】専門分野×効果実感

専門分野による効果実感に大きな差はみられず、いずれの分野でも8割以上がAI利用による効果を実感している。特に情報系では92.3%と最も高かった。



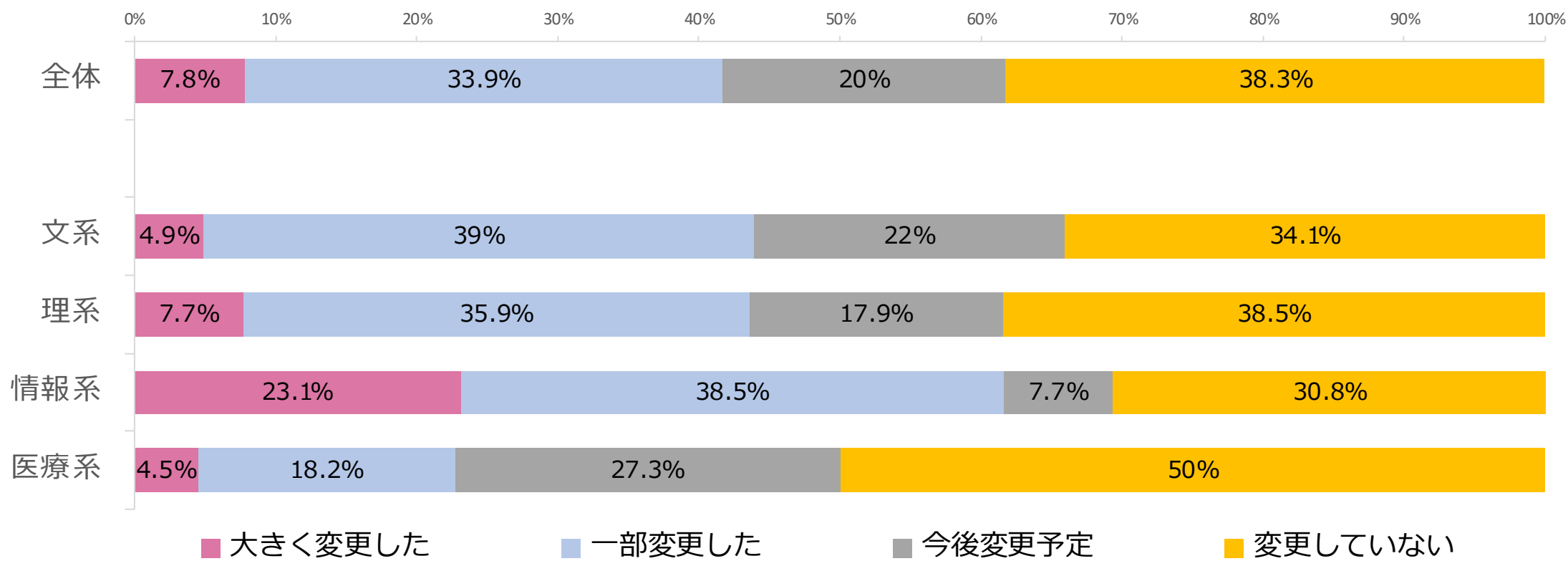
## 調査結果 7-5.【分析】専門分野×有用性

AIの有用性については、いずれの専門分野でも高く評価されている。情報系では100%、理系でも92.3%が有用と回答しており、文系でも8割を超えるなど、専門分野による大きな差はみられない。



## 調査結果 7-6.【分析】専門分野×授業・課題・評価の変更

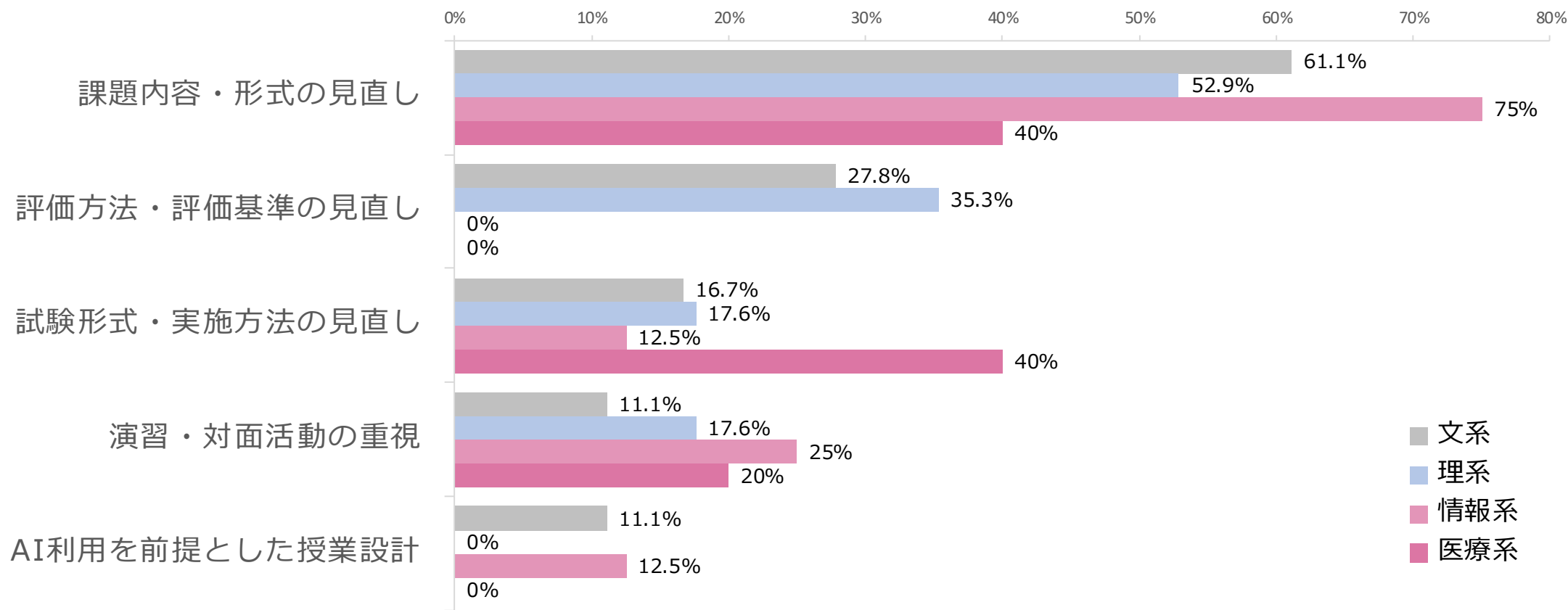
授業・課題・評価の変更状況には専門分野による違いがみられた。情報系では「大きく変更した」と「一部変更した」を合わせると61.6%となり、変更済みの割合が比較的高い。一方、医療系では「変更していない」が50%と最も高く、分野によって対応状況に差がみられる。



# 調査結果

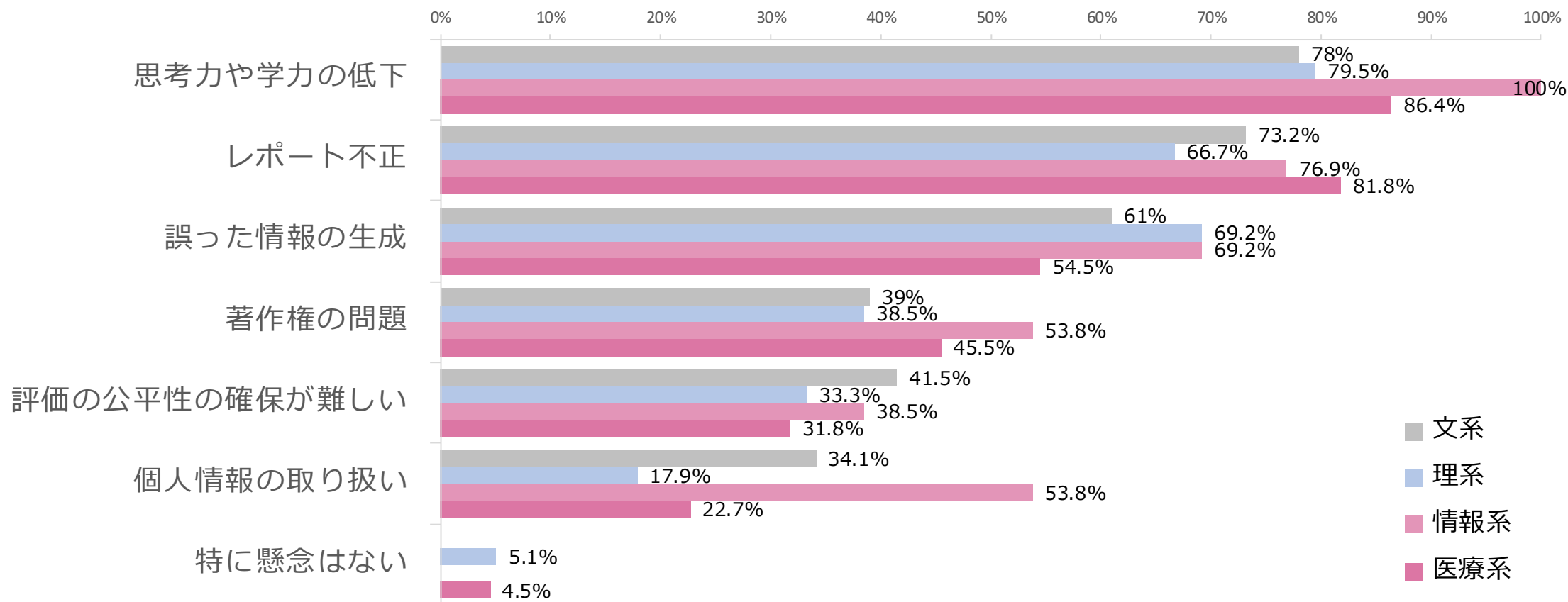
## 7-7.【分析】専門分野×授業・課題・評価変更内容

変更内容は、いずれの専門分野でも「課題内容・形式の見直し」が中心となっている。情報系では75%と特に高く、医療系では「試験形式・実施方法の見直し」の割合も比較的高いなど、分野の特性に応じた対応がみられる。



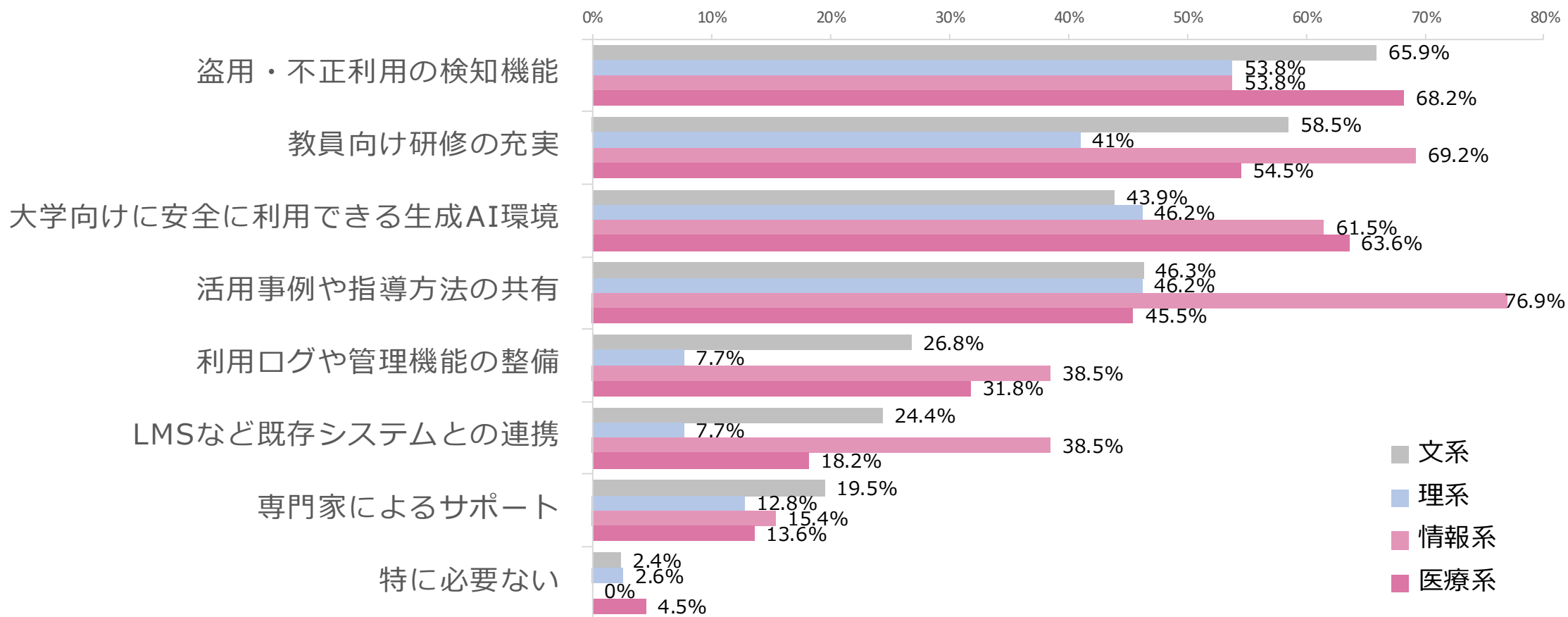
## 調査結果 7-8.【分析】専門分野×懸念

AI活用への懸念は、いずれの分野でも「思考力や学力の低下」と「レポート不正」が上位を占めた。情報系では「個人情報の取り扱い」、医療系では「レポート不正」への懸念が比較的高い傾向がみられる。



## 調査結果 7-9.【分析】専門分野×必要支援

「盗用・不正利用の検知機能」や「教員向け研修の充実」は多くの分野で高い割合を占めた。また、情報系では「活用事例や指導方法の共有」が76.9%と特に高く、実践的な知見の共有が求められていることが分かる。



# 大学におけるAI活用実態調査報告書

デジタル・ナレッジ 調査



2026年8月発行

発行元：株式会社デジタル・ナレッジ「eラーニング戦略研究所」

〒110-0005 東京都台東区上野5丁目3番4号 eラーニング・ラボ 秋葉原

Tel. 03-5846-2131／Fax. 03-5846-2132

<https://www.digital-knowledge.co.jp/>

(禁無断転載・転用・複写)